

2016 年度社会構築論系
地域・都市論ゼミ 2 ゼミ論文

田舎に幸せはあるのか
—阿南市を事例に考える田舎者の幸福論—

主査 浦野正樹教授

早稲田大学 文化構想学部 社会構築論系 4年
浦野ゼミナール所属
1 T131106-1 山本寛人

目次

序章

序-1. 問題意識.....	4
序-2. 調査方法.....	5

1章 阿南市の概要と「幸福度調査」から分かる市民の幸せ

1-1 阿南市の概要.....	6
1-2 阿南市の幸福度調査について.....	8
1-3 阿南市の幸福度調査の結果について.....	10
1-4 荒川区の幸福度調査について.....	11
1-5 二つの地域の幸福度調査の比較から分かる阿南市民の意識の特徴.....	13
1-6 幸福度調査からはわからないこと.....	14

2章 阿南市民の類型と残存ヤンキーの生き方・幸せ

2-1 「幸福学」について.....	15
2-1-1 幸福学とは何か.....	15
2-1-2 幸福にかかわる四つの因子.....	16
2-1-3 どのような人が最も幸せか.....	17
2-2 「生き方」に着目する先行研究.....	17
2-3 阿南市民の類型化.....	18
2-4 残存ヤンキーについて.....	20
2-4-1 阿南市の残存ヤンキーについて.....	20
2-4-2 残存ヤンキーの行動原理・特徴.....	21
2-4-3 阿南市の残存ヤンキーの特徴.....	22
2-4-4 残存ヤンキーはどれほど幸せか、いかに生きればより幸せになれるか.....	25

3章 残存ヤンキーとの対比でみる阿南市民の生き方・幸せ

3-1 エリート層.....	26
3-1-1 阿南市のエリート層について.....	26
3-1-2 エリート層はどれほど幸せか、いかに生きればより幸せになれるか.....	28
3-2 地元族.....	29
3-2-1 阿南市の地元族について.....	28
3-2-2 地元族はどれほど幸せか、いかに生きればより幸せになれるか.....	30
3-3 非つながり層.....	31
3-3-1 阿南市の非つながり層について.....	31

3-3-2	非つながり層はどれほど幸せか、いかに生きればより幸せになれるか.....	31
3-4	移住者.....	32
3-4-1	阿南市への移住者について.....	32
3-4-2	移住者はどれほど幸せか、いかに生きればより幸せになれるか.....	34
3-5	阿南市内部での地域への意識・人とのつながりの違い.....	36
3-5-1	中心部と周辺部の構造的違い.....	36
3-5-2	地域への意識やつながりの違いについて.....	37
3-6	「主体性のなさ」や「現状を変えようとする意識」を構成する構造.....	38
3-6-1	阿南市民に蔓延する意識.....	38
3-6-2	意識を形成する構造的要因.....	40
3-6-3	「人、モノ、サービスの少なさ」による「反証」の少なさ.....	40
3-6-4	製造業の盛んさが形成する「主体的」でなくとも成立する「日常」.....	41
3-6-5	固定化された人間関係と場の数の少なさによる「新しい私」になることの阻害.....	41
4	市民の「内的」な幸福度を高めるためのまちづくりとは	
4-1	「幸福」にまつわる阿南市の課題.....	43
4-2	人々が集う「場」―「楽しさ」と「正しさ」を重ねる―.....	45
4-3	市民の興味・能力を発揮する場づくり―誰もが人生の「主役」であること―.....	46
4-4	市民との協同により「前向き」な意識を醸成―小さな進歩に目を向ける―.....	47
4-5	「阿南市ならではの」の人生の物語を生み出す―「価値」を市民の人生の内部へ―.....	48
4-6	市民の特徴を活かしたまちづくり―市民の性質にまちづくりを重ねる―.....	48
5	終章	
5-1	まとめ(フロー図).....	50
5-2	本論文の到達点と意義.....	51
5-3	謝辞.....	52
	参考文献.....	53

序章

序-1. 問題意識

私は今回対象地とした徳島県の阿南市の出身だ。しかし、私は阿南市が嫌いだった。遊ぶところも少なく、所得も低く、若者も少ないこの土地に生きる幸せなどあるのだろうか。私は阿南市で生きる幸せがどうしてもイメージできず、都会に飛び出した。だが、思い返してみると、そのような阿南市で幸せそうに生きている人々は確かにいた。遊ぶところも少なく、所得も低く、若者も少なくても地元に残り、幸せそうに生きている人はいる。彼らは本当に幸せなのか、なぜ幸せなのか、どのような人が幸せなのか、どう生きれば幸せなのかなど疑問は尽きず、それらの問いは私の人生の中で最も大きな疑問となった。

また、昨今の世の中では「地域活性化」や「地方創生」が声高に叫ばれているが、様々な意味でとらえられた「地域活性化」や「地方創生」が行われている。ある地域では、地方に人を呼び込むイベントを盛んに企画したり、ある地方では移住者を呼び込む施策を展開したりと、「地域活性化」や「地方創生」はとてもあいまいな定義でとらえられているものである。しかし、私自身それらの究極的な目的・到達地点は「地域コミュニティ内の幸福度を高める」ということに帰着すると考える。地方でイベントを開催することも移住者を増やすこともコミュニティを持続的に発展させ、人々を幸せにする手段にすぎないのではないだろうか。

そのような考えは、全国に広がりつつある。荒川区は全国に先駆けて、「幸福」に着目した。荒川区の西川太一郎区長は2004年に区長に就任したとき、基礎自治体の長の責任として「区民の幸福を高めていく」ことが、目指すべき究極の目標だと考えた。そこで掲げたのが、「区政は区民を幸せにするシステムである」というドメイン（事業領域）である。また、2013年6月には、全国52の基礎自治体からなる、住民の幸福実感向上を目指す基礎自治体連合、通称「幸せリーグ」が設立された。その幸せリーグに阿南市も参加し、昨年阿南市民を対象に「幸福度調査」を実施した。そのため阿南市でも市民の幸せに着目をする時代の流れが来ているといえる。

そのような中で、本論文では阿南市民における「幸せ」について考えることを目的とする。それも市民の「生き方」に目を向けた「内的」な幸せである。阿南市で昨年行われた「幸福度調査」で示されているのは市民が生きる環境などに左右されるような「外的」な幸せである。しかし、「外的」に作り出された地域を「どう生きるか」という目線で幸福について考えることもより一層大切であると考え。たとえば、もし阿南市にディズニーランドがあったとしても、一緒に行く友人を持たないような生き方をしている人は、ディズニーランドから幸せを感じられないだろう。市民の「内的」な幸せの目線を忘れては、真の意味での市民の幸せは達成されない。そのため本論文では市民の「生き方」に着目した「内的」な幸せについて論じることを目的とする。

本論文では、まず第一章で阿南市の「幸福度調査」の結果から浮かび上がる市民の意識

について記述する。しかし、幸福度調査で明らかになっているのは「年齢」や「性別」によって場合分けはされているが、あくまでも「阿南市民全体としての幸福」である。また、「幸福度調査」だけでは不十分な市民の「生き方」の目線に立った「内的」な幸せについても検討が必要である。そのため第二章、第三章では、阿南市民を彼らの「生き方」によりタイプ別に分けた後、幸福にまつわる心理学がベースとなった「内的」な幸せにまつわる理論である「幸福学」という視点を用いて「どのようなタイプの市民がどれほど幸せなのか」について考える。ここで浮かび上がってくるのは阿南市民においては「残存ヤンキー」という層の人々がとても幸福度が高いのではないかということだ。そこで彼らの生き方、幸福度について第二章で詳しく記述する。その次に第三章で「残存ヤンキー」の人々の生き方と比較しながら、他のタイプの人々の生き方や幸福度について詳しく記述する。そして最後に阿南市民がより幸せに生きていく生き方とは何か、またそのためのまちづくりとはどういったものかを記述する。

序-2. 調査方法

阿南市民の幸福にまつわる意識やライフスタイルなどを記述する手段として、量的なデータとしては平成 28 年に作成された「市民“幸福度”調査結果報告者」、「阿南市人口ビジョン」、平成 20 年に作成された「阿南市民まちづくり意識調査結果」などを参考にした。また、質的なデータとしては、阿南市民を類型化し、それぞれのタイプの市民にヒアリング調査を実施した。

1 阿南市の概要と「幸福度調査」から分かる市民の幸せ

1-1 阿南市の概要

阿南市は徳島県の南東部に位置し、徳島県の中心部からは車や鉄道で 30 分ほどである。人口は約 76000 人で、市内には高速バスの発着点があり、警察・保健所・消防署・検察庁・裁判所なども備え県南の行政・交通機関の中心である。現代でも蛍光体や蛍光ダイオードの国内外の一大産地で、青色発光ダイオードで有名な日亜化学工業の本社と工場が三つあり、四国で最初に太陽が昇る町でもある事から「光のまち阿南」としてPRしている。また、平成 19 年からは四国初のナイター付両翼 100m 級野球場アグリあなんスタジアムを完成させ「野球のまち阿南」としてもPRを続けている。

商業の面に関しては大型のショッピングセンターが市に 3 つあり、市民の生活や娯楽の中心となっている。各町内にスーパーやディスカウントストアもそろっており日常の消費を支えている。また、市内の商店街は以前と比較して衰退しているが、各店舗は地域の専門店として機能している。

自然動態としては 2010 年～2014 年の五年間では、出生・志望者数ともにほぼ横ばいで推移していて、すべての年で死亡者数は出生数を約 300 人上回っている。社会動態としては毎年、転出が転入を 100 人～200 人上回っている。しかし、2012 年には 99 人の転入増ともなっている。

転入、転出先としては県内と県外がほぼ半々で、県内では転入・転出ともに徳島市が最も多く、転出では全体の約 3 割を占めている。また、県外では転入は香川県、転出は大阪府が最も多くなっている。

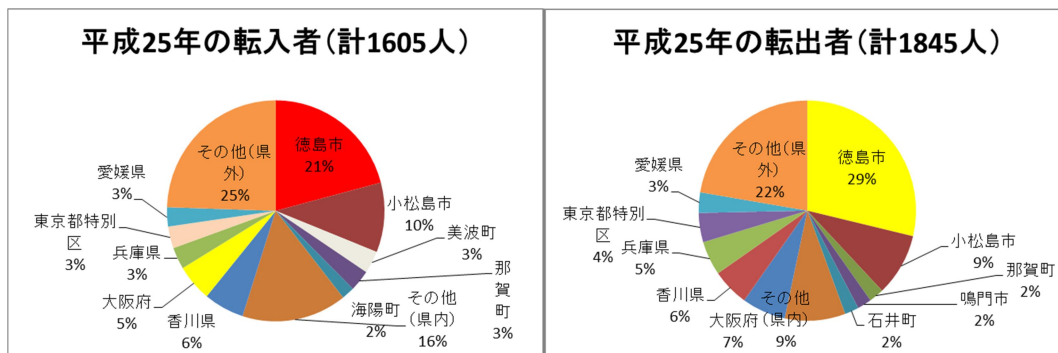


図 1 阿南市の転入者・転出者 『阿南市人口ビジョン』より筆者作成

平成 22 年の市内常住の就業者・通学者 36,489 人の従業・通学地についてみると、市内が 28,285 人 (77.5%)、他市区町村が 8,204 人 (22.5%) となっている。他市区町村の通勤・通学先は、徳島市が最も多い 4,039 人 (49.2%)、次いで小松島市が 2,355 人 (28.7%)、那賀町が 498 人 (6.1%) の順となっている。ここで特徴的なのは職場や学校と住まいが非常に近い地域にある場合が多いということである。

産業についてみてみると平成 22 年の阿南市常住の就業者では製造業が 6,970 人と最

も多く、そのうち 5,827 人 (83.6%) が市内で就業している。次いで、卸売業・小売業 が 4,437 人で、そのうち 3,235 人 (72.9%) が市内で就業している。また、ここからもわかるが、阿南市で最も盛んな産業は製造業である。各自治体のある産業の比率と比較したもので、「1」を超えていれば全国に比べ特化していると判断できる産業特価係数を見ても、製造業の付加価値は 2.96、労働生産性が 1.34 となっていて、製造業が阿南市の基幹産業として成り立っていることがわかる。

また、将来の人口について、趨勢人口としては、2015 年の約 75000 人から、2060 年には約 46000 人にまで減少することが予想されている。そのため阿南市は、戦略人口として 63000 人超の人口規模を目指している。消費面・生産面から多くの役割を担うことが期待されている生産年齢人口は 2010 年の 60.4%から 2060 年には 50%程度にまで減少するものと想定されている。

この人口予測から考えられる介護ニーズについては、2030 年には現状の 133%程度の水準でピークを迎え、その後 2060 年までほぼ横ばいの水準でニーズが見込まれている。また、医療ニーズについては 2025 年の 106%程度をピークに、緩やかに縮小していくことが想定されている。

これらの現状を踏まえ、「阿南市人口ビジョン」では今後の目指すべき方向性が示されている。方向性の一つは「ひと」が「しごと」を呼び込み、「しごと」が「ひと」を呼び込む循環の創出である。阿南市独自は LED 産業に代表される工業やタケノコなどの農産物の産地として知られているが、これらを活かし、阿南市独自の産業強化や創業・企業の支援により定住の第一条件となる「しごと」の確保を図ることを示している。また、阿南市への UIJ ターン希望者に向けて、就業支援や企業への人材の活用を奨励する取り組みなどにより「ひと」の流れの創出を図ること、「しごと」の確保から「ひと」の流れを創出することにより転出を抑制、転入超過への転換を図ることも示している。

方向性のもう一つは若い世代の結婚・子育てに関する希望の実現である。阿南市の有配偶率は国や県と比較しても低くはなく、合計特殊出生率も近年は国や県に比べ高い値で推移している。しかし、若者人口の減少により出会いの機会は少なくなり、また晩婚化傾向などを背景に合計特殊出生率に関しても人口が均衡した状態となる 2.07 には届いていない。そのため、今後は「出会い」、「結婚」、「出産」、「子育て」とそれぞれのステージに対応した切れ目のない支援体制を充実させることにより、出生数の減少の抑制を図ることを示している。

1-2 阿南市の幸福度調査について

平成二十七年、阿南市は市民を対象とした幸福度調査を実施した。これは市民の“幸福度”という視点にたち、市民の生活の豊かさ、心の豊かさに少しでも寄与できる施策に取り組むことを目的として実施されたものである。この調査で用いられている幸福にまつわる指標は、東京都の荒川区自治総合研究所が作成した『荒川区総幸福度（GAH）指標』である。実際に荒川区はこの指標を用いて平成25年に『荒川区民総幸福度（GAH）に関する区民アンケート調査』を実施している。

この指標は、「幸福実感度」と、その基礎となる「健康・福祉」「子育て・教育」「産業」「環境」「文化」「安全・安心」の6つの分野の指標によって構成されている。詳しい指標は以下のとおりである。

図表 2 荒川区民総幸福度（GAH）指標の質問文一覧

分野	No.	指標	質問文
健康福祉	1	幸福実感度	あなたは幸せだと感じますか？
	2	運動の実施	体を動かしたり運動したりすることができていると感じますか？
	3	健康的な食生活	健康的な食生活を送ることができていると感じますか？
	4	体の休息	体を休めることができていると感じますか？
	5	つながり★	孤立感や孤独感を感じますか？
	6	自分の役割	家庭や職場、学校、地域などで、自分の役割があると感じますか？
	7	心の安らぎ	心が安らぐ時間を持つことができていると感じますか？
	8	医療の充実	お住まいの地域に、安心してかかることができる医療機関（病院や薬局など）が充実していると感じますか？
	9	福祉の充実	お住まいの地域では、高齢者や障がい者への福祉が充実していると感じますか？
	10	健康の実感	心身ともに健康的な生活を送ることができていると感じますか？
子育て・教育	11	規則正しい生活習慣	お子さんが、規則正しい生活習慣を身につけていると感じますか？
	12	「生きる力」の習得	お子さんが、社会で生きていく上で必要な知識や技能、社会性、体力などを身につけていると感じますか？
	13	親子コミュニケーション	親子の間でコミュニケーションがとれていると感じますか？
	14	家族の理解・協力	あなたのご家族には、子育てに関する理解や協力があると感じますか？
	15	子育て・教育環境の充実	お住まいの地域における子育て・教育に関する事業・サービス・施設など（提供しているのが、民間か行政かを問わず）が充実していると感じますか？
	16	地域の子育てへの理解・協力	お住まいの地域に、子育て家庭に対して理解し、協力する雰囲気があると感じますか？
	17	望む子育てができる環境の充実	自分が望む子育てができるような環境があると感じますか？
	18	子どもの成長の実感	お子さんが健やかに成長していると感じますか？
産業	19	生活の安定★	生活を送るために必要な収入を得ていくことに不安を感じますか？
	20	ワーク・ライフ・バランス	仕事と生活とのバランスが取れていると感じますか？
	21	仕事のやりがい	仕事に、やりがいや充実感を感じますか？
	22	まちの産業	荒川区の企業（お店や工場など）は元気で活力があると感じますか？
	23	買ひ物の利便性	お住まいの地域での買ひ物が便利だと思えますか？
	24	まちの魅力	荒川区は、区外から人が訪れたいくなる魅力のあるまちだと思いますか？
	25	生活のゆとり	経済的な不安がなく、買ひ物などに不便のない生活を送ることができていると感じますか？
環境	26	施設のバリアフリー	お住まいの地域の商業施設や公共施設が、バリアフリーの面から、だれもが使いやすいと思えますか？
	27	心のバリアフリー	お住まいの地域には、困っている人を見かけた時に、声を掛けたり協力したりしやすい雰囲気があると感じますか？
	28	交通利便性	お住まいの地域は交通の便が良いと感じますか？
	29	まちなみの良さ	お住まいの地域のまちなみ（景観・緑など）は良いと感じますか？
	30	周辺環境の快適さ★	お住まいの地域で、生活する上での不快さを感じますか？
	31	持続可能性	あなたは、節電やごみの減量など、地球環境に配慮した生活をしていると思えますか？
	32	生活環境の充実	お住まいの地域が、バリアフリーの状況や交通の便、まちなみの良さ、快適さ等の点から総合して暮らしやすい生活環境であると感じますか？
文化	33	興味・関心事への取組	興味・関心のあることに取り組むことができていると感じますか？
	34	生涯学習環境の充実	生涯にわたって学習できる環境が充実していると感じますか？
	35	地域への愛着	荒川区の文化や特色に愛着や誇りを感じますか？
	36	地域の人との交流の充実	お住まいの地域の方と交流することで充実感が得られていると感じますか？
	37	地域に頼れる人がいる実感	お住まいの地域に頼れる人がいると感じますか？
	38	文化的寛容性	お住まいの地域には、文化や言語が自分と異なる人々を理解しようとする雰囲気があると感じますか？
	39	充実した余暇・文化活動、地域の人とのふれあいの実感	充実した余暇・文化活動や地域の方とのふれあいのある生活が送れていると感じますか？
安全・安心	40	防犯性★	お住まいの地域で、犯罪への不安を感じますか？
	41	交通安全性★	お住まいの地域で、自動車や自転車などの交通事故の危険を感じますか？
	42	生活安全性★	家庭や学校・職場などで、転倒、転落、落下物などの危険を感じますか？
	43	個人の備え	災害（地震・火災・風水害）に対する備えを十分にしている安心感がありますか？
	44	災害時の絆・助け合い	災害時に近隣の人と助け合う関係があると感じますか？
	45	防災性	お住まいの地域は災害に強いと感じますか？
	46	安全・安心の実感	お住まいの地域は犯罪や事故、災害などの点から総合して安全だと感じますか？

『荒川区民総幸福度（GAH）指標』の質問文一覧『荒川区民総幸福度（GAH）レポート（公共財団法人荒川区自治総合研究所,2015）』より抜粋

これらの指標は市民の主観的な幸福度実感を把握する指標である。以下では指標が作られた背景を説明する。「健康・福祉」に関する指標では、これまでも多くの先行研究において「健康と幸福」の間の相関関係が示されてきた¹。また、世界保健機関（WHO）は健康を「単に病気や虚弱でないということではなく、身体的、精神的、及び社会的に完全に良好な状態」と定義している。そのため健康には、身体的健康、精神的健康、社会的健康があるが、GAHではそれぞれ「体の健康」「心の健康」「健康のための環境」と言い換えた上で指標化している（公益財団法人荒川区自治総合研究所,2012,pp.8-15）。

「子育て・教育」については、「子どもの成長の実感度」と「望む子育てができていく実感度」を上位の指標として挙げている。そして、その2つの上位指標の下位に来る指標の設定に当たっては、子育て・教育が行われる場としての「家庭」と「社会」という2つの領域を踏まえ、「家族関係」「生きる力」「子育て・教育環境」という3つのカテゴリーを設けている（公益財団法人荒川区自治総合研究所,2012,pp.16-20）。

「産業」に関しては「就労」と「地域経済」という二つの分野が設定されている。「収入と幸福度」の関係については多くの先行研究がある。国内では、大竹・白石・筒井が、世帯全体の所得、世帯の一人当たり所得の増加のいずれもが、一定の額までは幸福度を上昇させると指摘している²。また、「就労」については「失業」と「仕事の満足度」の二つの点で幸福度に影響を与えていると考えられている³。「地域経済」については、GAHにおいては国や地域の経済状況も個人の幸福度に影響すると考えられ、地域の産業が豊かで活発な状態にあれば、当該地域の住民の幸福実感が上昇するものと推測している（公益財団法人荒川区自治総合研究所,2012,pp.21-29）。

「環境」においては「住環境」という概念をもとにしている。住環境とは単に個人の住宅まわりの居住環境だけでなく、その周囲の自然環境、社会的・経済的環境や地域的・文化的環境など、人間の生活に影響を及ぼす様々な要素を含んでいる。こうした住環境が適切に整えられることは、人々が健康で人間的な生活を営んでいく上で重要であるとGAHでは想定している（公益財団法人荒川区自治総合研究所,2012,pp.30-39）。

「文化」においては、GAHでは文化に関連して目指す幸福のあり方は、「余暇の過ごし

1

・ Frey, B.S. & A. Stutzer. (2001). *Happiness and Economics: How the Economy and Institutions Affect Human Well-Being*, Princeton Univ. Pr. : 佐和隆光監訳、沢崎冬日訳 (2005) 『幸福の政治経済学』ダイヤモンド社、p.83。

・ Putnam, R.D. (2000). *Bowling Alone: Collapse and Revival of American Community*, Simon & Schuster. : 柴内康文 訳 (2006) 『孤独なボウリング』柏書房、pp.408-409。

・ 内閣府 (2009) 『平成 21 年度国民生活選好度調査』。

2 ・ 大竹文雄・白石小百合・筒井義郎編著 (2010) 『日本の幸福度一格差・労働・家族』日本評論社。

3 ・ 内閣府 『国民生活選好度調査』平成 21 年度から平成 23 年度のデータ。

・ 大竹文雄・白石小百合・筒井義郎編著 (2010) 『日本の幸福度一格差・労働・家族』日本評論社。

方や文化とのふれあいによる精神的豊かさ・心のゆとりの実感度」であるとしている。そのため、「余暇活動」と「地域文化」の二つの側面から指標を作成している（公益財団法人荒川区自治総合研究所,2012,pp.40-47）。

「安全・安心」については、「犯罪」、「事故」、「災害」という観点から指標が作成されている。GAH ではこれらの安全性を脅かす環境要因を大限に減らしていくこと、そのようにして不安を減らし安心感を増していくことは、住民の日常の幸福度の向上に直結しているということができると想定している（公益財団法人荒川区自治総合研究所,2012,pp.41-48）。

1-3 阿南市の幸福度調査の結果について

『市民“幸福度”調査結果報告者』から阿南市の幸福度調査の結果について記述する。阿南市民の現在の幸福度について全体の平均点は十段階評価で 6.53 となっている。また、各年代の平均点でみると、年齢層が高くなるほど幸福度の点数は高くなっている。さらに、幸せにとって重要だと市民が考えていることは「健康・福祉」、「安心・安全」のポイントが高い傾向にあり、これは年齢・性別・幸福度別にみてもおおむね同様の傾向にある。

また、幸福度調査では、さまざまな分野における市民の実感も調査している。「健康・福祉」については、実感を「感じる（評価4～5）」が半数を超えているのは「心が安らぐ時間を持つことができている」（56.2%）「家庭や職場、学校、地域で自分の役割がある」（54.7%）となっていた。過半数の人が心が安らぎ、コミュニティなどで自分の役割を持っているということになる。また、「孤立化や孤独感」については、「ほぼ感じない（評価1～2）」が 52.8%と過半数を占めているが、「感じる（評価4～5）」は 18.4%と、概ね5人に1人が孤立や孤独を感じていることがわかる。また、この分野で幸せにとって重要だと市民が考えることは、「健康的な食生活を送れること」が最も多く、次いで「心が安らぐ時間を持つこと」が多くなっている。

「健康・福祉」と同じく市民が幸せの実現のために重要だと考えていることである「安心・安全」については評価が分かれている。「在住地域の自動車や自転車などの交通事故の危険」は「感じる（評価4～5）」が 49.1%、と高くなっている。一方で、「在住地域での犯罪への不安」は「感じない（評価1～2）」が 44.6%、「家庭や学校・職場などで転倒、転落、落下物などの危険」は「感じない（評価1～2）」が 41.3%となっている。また、この分野において「犯罪への不安がないこと」が最も幸せにとって重要なことであると評価している。

子育て・教育の分野について、市民は全体的にプラスの評価を下している。18歳未満の子どもを持つ市民の回答では「子どもが健やかに成長している」について、「感じる（評価4～5）」が 79.9%と高くなっており、その他に「自分の家族は子育てに関する理解や協力がある」（69.4%）、「親子間でコミュニケーションがとれている」（65.7%）、「子どもが規則正しい生活習慣を身につけている」（51.6%）が半数を超えている。また、この分野において、幸せにとって重要だと市民が考えることは「親子のコミュニケーションがとれている

こと」が最も多く、次いで「子どもが社会で生活していく上で必要な知識・技能・社会性・体力などを身につけていること」が多かった。

しかし、「産業」について市民は厳しい見方をしている。「生活を送るために必要な収入を得ることへの不安」について、「感じる（五段階評価で評価4～5）」が50.2%と半数を超えており、若い年齢層ほど不安感が高くなっている。また産業の分野で、幸せにとって重要だと市民が考えることは「生活を送るために必要な収入があること」が他と比べて圧倒的に多く、次いで「仕事と生活とのバランスが取れていること」となっている。

「環境」についても市民はやや厳しい見方をしている。「在住地域は交通の便が良い」について、「感じない（評価1～2）」が53.6%と半数を超えている。この点に関して、若者ほど低評価を下していて、「感じない（評価1～2）」の割合が“70歳以上”の38.8%に対し、“29歳以下”では71.7%となっている。また、この分野において幸せにとって重要だと市民が考えることについても、「地域の交通の便がいいこと」が最も高くなっていた

「文化」の面についてもやや厳しい見方がなされている。特に、「在住地域に文化や言語が自分と異なる人々を理解しようとする雰囲気がある」については、「感じる（評価4～5）」が8.6%と低く、「充実した余暇・文化活動や地域の方とのふれあいのある生活が送れている」については、「感じない（評価1～2）」が45.1%と高くなっている。また、文化の面で幸せにとって重要だと市民が考えることは「興味・関心のあることに取り組むことができていること」が最も多く、次いで「地域の人との交流があること」が「地域に頼れる人がいること」が多くなっている。

1-4 荒川区の幸福度調査について

荒川区では、「幸福実感都市あらかわ」の実現を目指して、全国に先駆けて荒川区民総幸福度（Gross Arakawa Happiness : GAH）に取り組んでいる。区では、平成25年10月に第1回目の『荒川区民総幸福度（GAH）に関する区民アンケート調査』を実施し、平成26年7月には、2回目の調査を実施した。これらの調査では約2000人から回答を得ている。

これら二回の調査では幸福度を五段階評価で集計しているが全体として25年度の調査では3.54、26年度の調査では3.56であった。また、「あなたの幸せにとって重要だと思う順」について、第一位に選んだ人の数が最も多かった分野は過去二回の調査ともに「健康・福祉」であり、次に多かったのが「安心・安全」であった。

また、性別・年齢で見ると男性では40～50代の幸福実感度が両年度とも最も低く、女性では20～30代の幸福度が両年度とも最も高くなっている。

居住年数で見ると過去二回の調査ともに「20年以上」の幸福実感度が最も低くなっている。家族構成別で見ると過去二回の調査とも「親・子・孫（三世代家族）」が最も幸福実感度が高くなっており、最も低いのは「一人暮らし」であった。

また、この調査では阿南市が行った幸福度調査と同様にさまざまな分野での区民の実感と、幸せのために重要なことが集計されている。平成二十六年度の調査を見ていく。

「健康・福祉」については、阿南市と同様に「コミュニティ内での自分の役割」や「心が安らぐ時間」を過半数の人が「感じる（五段階評価で評価4～5）」と回答している。また、この分野において区民が幸せのために重要だと考えることは「健康的な食生活を送れること」が最も多く、次いで「心が安らぐ時間を持っていること」が多くなっている。この点においても阿南市の結果と同じ結果になっている。

「子育て・教育」についても荒川区民が感じている実感はおおむね阿南市民と同様である。しかし、「お住まいの地域に、子育て家庭に対して理解し、協力する雰囲気があると感じますか？」という設問に対して、阿南市では「感じる（五段階評価で評価4～5）」と答えた割合が31パーセント、荒川区では45.7パーセントとなっている。一般的に地域との結びつきが強いと思われるのは地方であり、阿南市の方の実感が低くなっているのは意外である。

また、「お住まいの地域における子育て・教育に関する事業・サービス・施設など（提供しているのが、民間か行政かを問わず）が充実していると思いますか？」という設問に対しての回答では「感じる（五段階評価で評価4～5）」と答えた割合は荒川区の方が阿南市より10パーセント以上多くなっている。荒川区の方が都市部である分、様々な施設やサービスが充実しているため、当然の結果と言える。

「産業」については荒川区民も阿南市民と同様に「収入」への不安を感じている。「生活を送るために必要な収入を得ることへの不安」について、「感じる（五段階評価で評価4～5）」と答えた人の割合は48.1パーセントで約半数の人が阿南市民と同様に収入への不安を感じていることが分かる。また、幸せにとって重要なことについても阿南市と同様に「生活を送るために必要な収入があること」が最も多くなっている。一方阿南市と比較して大きく異なるのはまちの産業に関する点である。「荒川区の企業（お店や町工場など）は元気で活力がある」と実感している人の割合は8.4パーセントだったのに対し、阿南市では22.4パーセントの人が阿南市の企業の活力を実感している。阿南市にはLEDで有名な日亜化学工業が本社を置いており、市民の意識にはこの存在が大きく影響していると考えられる。

「環境」についてはバリアフリーや生活上の快適さなどについては阿南市とほぼ同様の結果となっている。しかし、交通の便の良さに関して阿南市と差が出ている。荒川区では「在住地域は交通の便が良い」と実感している人の割合が67.0パーセントと阿南市を大きく上回っている。また、幸せにとって重要なことは阿南市と同様に「地域の交通の便が良いこと」であった。

「文化」については、生涯学習や、地域への愛着などについてはほぼ同じ結果となっている。しかし、地域の人々との関係性についてはわずかに差が出ている。「在住地域の方と交流することで充実感が得られる」や「地域に頼れる人がいる」という設問では阿南市での実感が少し高くなった。阿南市では上記の設問に「感じる（五段階評価で評価4～5）」

と答えた人は 25.6 パーセント、28.4 パーセント、荒川区では 19.2 パーセント 20.8 パーセントとなっている。やはり、地方である阿南市のほうが地域の人々と密接な関係性を築いている傾向がみられる。

また、「興味・関心のあることに取り組むことができている」という設問については「感じる（五段階評価で評価 4～5）」と答えた割合が阿南市では 25.6 パーセント、荒川区では 31.8 パーセントと荒川区の実感が若干高くなっている。これは都市部である荒川区のほうが、自分の興味関心のある物事にアクセスしやすいためであると考えられる。

「安心・安全」については、阿南市の結果とおおむね同様であった。

1-5 二つの地域の幸福度調査の比較から分かる阿南市民の意識の特徴

以上の議論から、阿南市と荒川区の幸福度実感の相違点から浮かび上がる阿南市民の意識の特徴について考察する。相違点としてはまず初めに、年齢と幸福度の相関である。阿南市では年齢が上がるにつれて幸福度の実感は上がっていくが、荒川区ではそのような傾向は見られない。この要因の一つとしては阿南市のほうが人間関係が固定的であり、その関係性が年を経るごとに親密になっていくためであることが考えられる。平成 22 年の国勢調査の結果を見ると、阿南市の一般世帯の民間借家率は 11.3 パーセントなのに対し、荒川区では 38.7 パーセントとなっている。このことから阿南市では地域の中で人々の流動性が低く、人々の交友関係も親密であることが予想される。親密なコミュニティ内における「感謝」⁴や「親切心」⁵は幸福に影響を与えることが先行研究から明らかになっている。

また、子育て・教育に対する地域の意識においても違いが出ている。「お住まいの地域に、子育て家庭に対して理解し、協力する雰囲気があると感じますか？」という設問に関して阿南市では 31 パーセント、荒川区では 45.7 パーセントの人が「感じる」という実感を得ている。この理由としてはいくつか考えられるが、一つは阿南市においては親族や親が子育て、家庭に協力してくれるため、「地域」の協力をそれほど必要としないという理由が挙げられる。平成 22 年の国勢調査の結果では、荒川区の親族世帯のうち 89.5 パーセントが核家族であるのに対し、阿南市の核家族の割合は 75.1 パーセントと低くなっている。ここから阿南市ほうが同居している家族が子供の面倒を見るため、地域の協力をあまり必要としなくてもよいことがわかる。

しかし、地域の人々との親密な交流や信頼感という面では阿南市の実感は荒川区よりも若干高くなっている。「在住地域の方と交流することで 充実感が得られる」や「地域に頼れる人がいる」という設問ではどちらも 5 パーセント以上阿南市民の実感が高くなってい

⁴ 感謝が物欲を低下させ幸福を高める効果をもたらすことが知られている（Polak & McCullough, 2006）。

⁵ 親切心に基づく行為を日々カウントすることによって、幸福度は高まる（Otake, Fredrickson, et al, 2006）。

た。

また、「阿南市の不便さの実感」は荒川区と比べた時に浮かび上がる特徴である。「お住まいの地域における子育て・教育に関する事業・サービス・施設など（提供しているのが、民間か行政かを問わず）が充実していると思いますか？」という設問に対しては、阿南市民の実感荒川区よりも10パーセント以上低くなっている。地方であるため阿南市は様々な施設やサービスが不足しているが、それが実感としても表れている。また、「興味関心のあることに取り組むことができている」という実感については荒川区では31.8パーセント、阿南市では25.6パーセントと阿南市のほうが低くなっている。

また、地元の企業（お店や町工場）に対する肯定的な評価も特徴の一つである。荒川区では「地元の企業（お店や町工場）は元気で活力がある」と実感している人の割合は8.4パーセントなのに対し、阿南市では22.4パーセントの人が阿南市の企業の活力を実感している。この理由は阿南市の製造業の盛んさが影響していると考えられる。1-1でも既述したように、阿南市の製造業は全国に比べても盛んである。また阿南市に本社を構える日亜化学工業の影響も大きい。阿南市では青色発光ダイオード（LED）で有名な日亜化学工業が本社と複数の工場を置いている。また、阿南市では青年会議所を中心に、このLEDを用いた「光のまち・阿南」としてまちづくりを行っている。阿南市の中心市街地商店街や市役所周辺、カップルが多く集まる牛岐城公園などはLEDのイルミネーションで装飾されている。このように市民の生活や意識の中に日亜化学工業の功績は多大に影響を及ぼしている。

1-6 幸福度調査からはわからないこと

第一章では幸福度調査の結果から、阿南市民の全体としての意識や幸福について記述した。しかし、この幸福度調査では年齢や性別について場合分けがされてはいるが、阿南市民全体の幸せについて調査が行われている。しかし、本来幸福とは、それぞれ異なったライフコース、交友関係などといった「どう生きるか」という要素により「幸福の形」も「幸福度」も異なってくると考えられる。そのため、市民を、「生き方」によりいくつかの分類に分け、幸福について調べる必要があると考える。

また幸福度調査の指標は「まちづくり」を目的として作られている。そのため、「経済」や「犯罪」など「外的」な要因にかかわる指標が多い。しかし、私はそのまちを「どう生きるか」という観点からみた「内的」な幸せについて本論文で論じたいと考える。いくら「外的」な幸せの土俵が整えられても、それを生きる市民の「内的」な幸せが達成されなければ意味がない。そのため、より内的な「幸福」についての理論である、「幸福学」の理論を用いて、阿南市民の「幸福」について論じていきたい。

2 阿南市民の類型と残存ヤンキーの生き方・幸せ

2-1 「幸福学」について

2-1-1 幸福学とは何か

ここからは「内的」な幸福について考えるうえで指標となる「幸福学」について記述する。幸福とは何かを説く理論や新書、宗教などは世間にあふれているが、この論文では、あくまでも客観的な視点から「幸福」について分析を行っているため、この「幸福学」を取り上げる。「幸福学」が専門で慶応義塾大学の前野教授は、統計的に幸福に関係する四つの因子を導き出した。彼の研究では、心理学の先行研究などから幸福度に影響を与えると考えられる心的特性を洗い出し、その二十九項目八十七個の質問をインターネットで 1500 人に回答してもらった。そのアンケートの結果に因子分析を行い、幸福に寄与する四つの因子を導き出した。因子分析とは、物事の要因をいくつか求め、それら複数の要因がその物事にどれくらい影響を与えているかを統計的に見出すものである。つまり前野教授の研究は今までなされてきた「幸せ」にまつわる研究を体系化したものであるといえる（前野,2013, pp.96-103）。

また、この前野教授の「幸福学」においては幸福にかかわる「心的要因」が対象となっている。環境や身体的な要因はここでは除かれている。これが GAH に基づく「幸福度調査」と異なる点である。しかし、「幸福学」では幸福にかかわる「心的要因」について先行研究から詳しく洗い出されており、これも GAH に基づく「幸福度調査」との違いである⁶(前野,2013, pp.102-103)。

⁶ 楽観性、社会的比較思考のなさ、自己受容傾向、コンピテンス、自己実現尺度、人を喜ばせる傾向、ユーモア、自尊心、愛情、感謝傾向、将来への希望の強さ、勤労意欲、満喫傾向、思想・宗教があること、社会の要請にこたえていること、自律性、熟達の程度、積極的な他者関係、心配事がないこと、個人的成長の程度、人生の意義の明確傾向、目標の明確性、親切さ、気持ちの切り替えが得意であること、自己概念の明確傾向、最大効果の追及のなさ、環境制御性、人生の目的の明確傾向、制約の近くのなさをアンケート項目とし、因子分析を行っている（前野,2013,pp.102-103）。

因子分析のイメージ

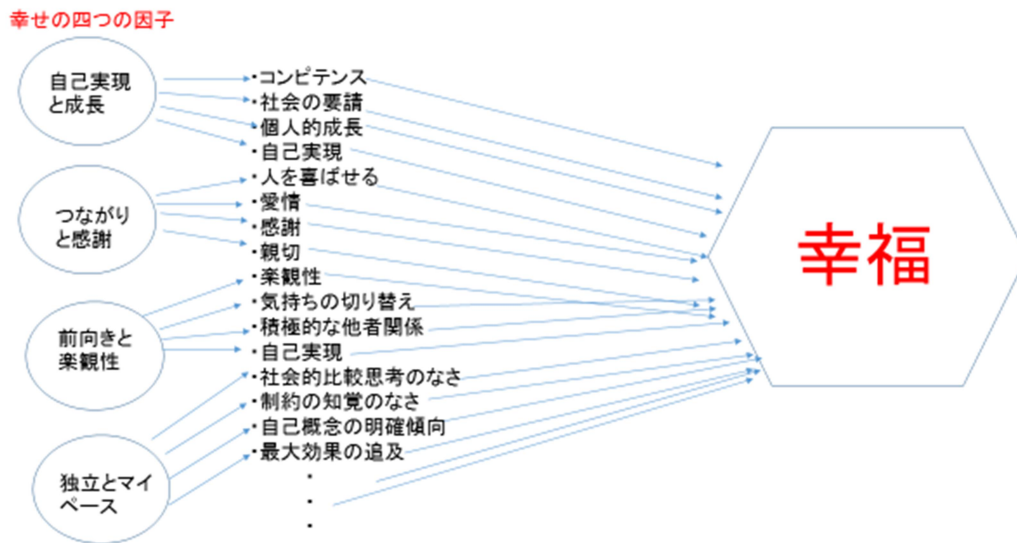


図 2 因子分析のイメージ 筆者作成

2-1-2 幸福にかかわる四つの因子

前野教授の研究では因子分析の結果、以下に示す四つの因子が発見された。

(1)「やってみよう（自己実現と成長）」因子である。これに関連が深かった（因子負荷率が高かった）アンケートの質問としてはコンピテンス（私は有能である）、社会の要請（私は社会の要請にこたえている）、個人的成長（私のこれまでの人生は変化、学習、成長に満ちていた）、自己実現（今の自分は本当になりたかった自分である）の4つである（前野,2013,pp.105）。

(2)「ありがとう（つながりと感謝）」因子である。これに関連が深かったのは、人を喜ばせる（人の喜ぶ顔が見たい）、愛情（私を大切に思ってくれる人たちがいる）、感謝（私は人生において感謝することがたくさんある）、親切（私は日々の生活において、他者に親切にし、手助けしたいと思っている）の4つである（前野,2013,pp.106-107）。

(3)「なんとかなる（前向きと楽観性）」因子である。これに関連が深かったアンケートの質問は、楽観性（私は物事が思い通りに行くと思う）、気持ちの切り替え（私は学校や仕事での失敗や不安な感情をあまり引きずらない）、積極的な他者関係（私は他者との近い関係を維持することができる）、自己実現（自分は人生で多くのことを達成してきた）の4つである（前野,2013,pp.108）。

(4)「あなたらしく（独立とマイペース）」因子である。これに関連が深かったのは、社会的比較思考のなさ（私は自分のすることと他者がすることをあまり比較しない）、制約の知覚のなさ（私に何ができないかは外部の制約のせいではない）、自己概念の明確傾向（自分自身についての信念はあまり変化しない）、最大効果の追及（テレビを見るときはあまり頻繁にチャンネルを切り替えない）の4つである（前野,2013,pp.109-110）。

2-1-3 どのような人が最も幸せか

前野教授の研究では 1500 人へのアンケート結果についてクラスター分析を行い、回答の近さから五つのクラスターが見いだされた。

i 最も幸せなグループ

先述の幸福にかかわる 4 つの因子がどれも強いグループが幸福度も最も高くなっていた。

ii 二番目に幸せなグループ

「自己実現と成長」、「つながりと感謝」は強いが「前向きと楽観」、「独立とマイペース」が弱いグループは二番目に幸福度が高くなっていた。

iii 幸福度が中くらいのグループ

4 つの因子が平均よりもやや下になっているグループが三番目に幸福度が高くなっていた。

iv やや不幸なグループ

「自己実現と成長」、「つながりと感謝」が弱く「前向きと楽観」、「独立とマイペース」が強いグループが下から二番目の幸福度を示すグループとなった。

v 最も不幸なグループ

四つの因子がどれも低く、ネガティブ感情も高いグループが最も幸福度の低いグループとなった。

2-2 「生き方」に着目する先行研究

本論文では阿南市民の生き方について着目したいと述べたが、その点について記述するときに「社会構築主義」や「ナラティブ」の概念を参考にしたい。

社会構築主義とは、現実の社会現象や、社会に存在する事実や実態、意味とは、人々の頭の中で意識や感情として作り上げられたものであり、それを離れては存在しないとする、社会学の立場である。たとえば、「阿南市から出ていく」という行為は、地元に残るのが当然であると教えられた子供にとっては「地元を見捨てる」という行為として解釈されるが、地元に残らず積極的に世界に飛び出していくべきだと教えられた子供にとっては「成功へのプロセス」として解釈されるだろう。

また「ナラティブ」とは日本語で「物語」のことであるが、「ナラティブ心理学」では人間存在を、人間ひとりひとりによって生きられ、体験され、解釈されるものとしてとらえている。我々は日常のなかで起こる様々な出来事を「物語」としてその時間軸や前後関係によって秩序立てて意味づけを行い解釈していく。つまり人間はどんな経験にも「物語性」を求め、またその「物語」は一貫性を持っている(ミシェル・L・クロスリー,2009,pp.87-95)。

これはたとえば幼少のころから学級委員をつとめ、現在は社長を務めているような男性は「リーダーとしての物語」を生きていて「自分はリーダーに向いている」と自分に意味づけを無意識的に行っており、息子の PTA の役員も率先して引き受けるといったことであ

る。

阿南市民の生き方について考えるとき、先に紹介したように、「阿南市での生活」をどのような物語を描き、解釈を行い、生きているかということに着目することが大切だと考える。以下では阿南市民をその生き方に関して類型化を行う。

2-3 阿南市民の類型化

次に阿南市民を類型化し、それぞれの生き方、幸せについてみていきたい。では、阿南市民にはどのようなタイプがいるだろうか。本論文では「生き方」に注目して類型化をしたい。まず、初めに「阿南市内出身者」と「阿南市外出身者」に分けて考える。平成20年に実施され、阿南市民を無作為に抽出し、1049名から回答を得た『阿南市市民まちづくり意識調査』では市民の居住歴の項目が設けられていた。この回答結果では、阿南市に「生まれてからずっと住んでいる」と答えた割合は44.5パーセント、「市以外での居住経験がある」と答えた割合は22.0パーセント、「県内他市町村から転入してきた」と答えた割合は19.7パーセント、「県外から転入してきた」と答えた割合は10.4パーセントとなっていた（無回答は3.3パーセント）。

この結果から、阿南市民の約六割から七割は地元出身者であり、そのうちの約四割は生まれてからずっと阿南市に居住していることが想定される。また、「生まれてからずっと住んでいる」と答えた回答者の85.5パーセントはこれからも阿南市に住み続けたいと答えている。このようにとても地元志向の強い人々が阿南市のマジョリティであるといえる。このような人々を本論文では博報堂ブランドデザイン若者研究所の原田曜平氏が著書、『ヤンキー経済 消費の主役・新保守層の正体』の中で用いている「マイルドヤンキー」という言葉を借りて表現したい。

原田氏は著書の中で現代の若者を四つに分類している。そのうちの一つが「マイルドヤンキー」だ。「マイルドヤンキー」とは彼の定義に従えば、「生まれ育った地元で生活することを志向し、中学時代から続く固定的で狭い人間関係を構築している若者」である。（原田,2014,pp.86-89）また、原田氏は別の機会に「マイルドヤンキー」の特徴として、地元から出たくない、「絆」「家族」「仲間」という言葉が好き、車（特にミニバン）が好き、ショッピングモールが好きなどの特徴を挙げている⁷。

また「マイルドヤンキー」はさらに「残存ヤンキー」と「地元族」の二つのタイプに分けられる。「残存ヤンキー」とは、腰まで下げたズボンやスウェットなどのヤンキーファッションを好み、成人式のときにはリーゼントや袴を身に着け派手な格好をするなど、いわゆる典型的なヤンキーの姿を保った人々である。しかし中身は大変マイルドな人がほとんどである。一方で「地元族」は見た目には全くヤンキー性はない。しかし、残存ヤンキーと同じく人間関係は狭く、中学時代のなどの少人数の地元友達とつるむ。地元のファミレ

⁷ 2014年5月12日放送のNHK「NHKニュースおはよう日本」出演時の発言。

スや居酒屋や仲間の家でだらだら過ごすのが好きで内心で多少のヤンキー性は保っているなどといった特徴がある（原田,2014,pp.19-22）。

つまり、先に示した、阿南市にずっと住み、これからも阿南市に住み続けたいと考える人々はこの「マイルドヤンキー」的な人々であることが予想される。割合としては、『阿南市市民まちづくり意識調査』の結果から推定して、約四割～五割であると考えられる。ではその他の人々はどのようにタイプ分けされるだろうか。原田氏はほかの若者のタイプについて、学歴が高く人間関係の開拓に積極的な「エリート」、ネットやアニメなどの娯楽に打ち込み同好の友人たちとの交友関係を形成する「オタク」、上京志向が高く行動力のある「ギャルサー」と分類を行っている。

阿南市においては一度県外の大学などに進学し、地元に戻ってきて地域の金融機関や公務員として勤める市民も一定数いる。『阿南市市民まちづくり意識調査』では約2割の市民が「市以外での居住経験がある」と回答していた。そのため阿南市においても「エリート」層は一～二割ほど存在すると考えられる。しかし、上京志向の強い「ギャルサー」層は上京して阿南市に戻ってこないためほとんど存在しないと考えられる。また、インタビュー調査の結果から、「オタク」層は阿南市においては、主にオタク同士で結びついているというより「地元族」層と結びついている傾向が見受けられた。そのため本論文では、「オタク」層とは表現せず、「地元族」の一部として考える。

以上の議論から阿南市が地元である市民の類型としては、「残存ヤンキー」、「地元族」、「エリート」が考えられる。しかし、地元出身であるが「エリート」層のように地元以外のつながりも「マイルドヤンキー」のように地元で根差したつながりも形成していない人々も存在する。そのような人々を「非つながり層」と表現する。

では、地元が阿南市ではない人々はどうか。『阿南市市民まちづくり意識調査』の結果から考えると、約三割の市民は阿南市が地元ではないと考えられる。この移住者にも様々なタイプがいると考えられるが、「生き方」や「幸せ」について考えるときに彼らが「積極的」な理由で阿南市に移り住んできているかどうか重要であると考えられる。例えば、阿南市の加茂谷地区では都市部から農業に従事するために移り住んでくる人が増加しており、移住者が中心となって地域でイベントを開いたりする動きもある⁸。このように積極的に目的意識を持ち、交友関係も新しく広げていく移住者はまだ少数であるが、彼らの幸福度はとても高く見える。そのため、本論部では移住が「積極的」か「消極的」かという分類を用いて表したい。

以上の議論をまとめると阿南市民の類型は以下の図のようになる。これらの市民の生き方について考えてみると、「残存ヤンキー」層の幸福度がとても高くそして特徴的な生き方をしているのではないかということが考えられた。そのためここからは「残存ヤンキー」

⁸ 宝の島・徳島 わくわくトーク 第46回、
<http://www.pref.tokushima.jp/governor/dialogue/wakuwaku-talk/2016022900011/movie/s/3/> 2016.12.5 閲覧。

層の生き方や幸せについて検討した後で、他の層の生き方や幸せについて「残存ヤンキー」層と対比的に検討していく。

阿南市民の類型化

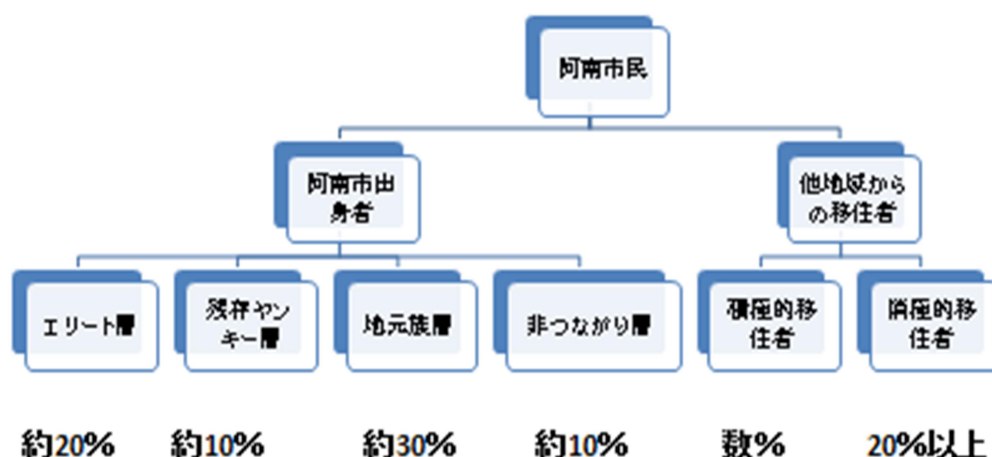


図 3 阿南市民の類型化 筆者作成

2-4 残存ヤンキーについて

2-4-1 阿南市の残存ヤンキーについて

Aさんは残存ヤンキーの典型的な例である。父親は地元で板金工を営み、母親は専業主婦という家庭で育った。三人兄弟の長男である。彼は小学校のころからやんちゃで友人の中では中心的な存在であった。中学に入ると髪を茶髪にしたり、他の中学のヤンキーたちとつるんだり「ヤンキー」化したが、犯罪や暴走などの反社会的な行為までは及ばなかった。高校は地元の工業高校に進み、卒業後は知り合いのつてでとび職として働いている。交友関係は主に中学時代の同級生やヤンキー仲間などと親密な関係を築く。成人式の際には仲間同士の名前と「四国阿南」と大きく書かれた大きな旗を仲間たちでお金を出し合っで作り、リーゼントと袴で派手に目立つことを意識した。20代の前半で地元の女性と結婚し、すでに子供は一人いる。彼の親や友人たちも彼と同じぐらいの年に結婚して子供を授かっており、彼にとってその年で家庭を持つことは普通のことである。結婚してからは家

庭をととても大切に思い、家族で出かけた写真や日々の出来事を Facebook などに挙げ、家庭中心である日常を送っている。A さんの両親もこの残存ヤンキー的な人々であるが、40 代、50 代となっても中学時代から続く人間関係や家族中心の生活は変わらないようだ。A さんの成人式には、本来成人となる本人だけが出席する式であるが、会場の外で写真を撮る A さんの両親やその友人の姿が見られた。

彼らの特徴をまとめると、「阿南市での暮らしへの肯定感」、「固定化した人間関係」、「残存ヤンキーであることの誇り」、「10 代か 20 代にかけての具体的な将来イメージ」、「地元志向」、「家族主義」などがあげられる。これらは阿南市の残存ヤンキーならではの特徴である。これらについては 2-4-3 でこれらの詳細について記述する。その前に 2-4-2 では先行研究から「残存ヤンキー」的な人々の行動原理や特徴について検討する

2-4-2 残存ヤンキーの行動原理・特徴

残存ヤンキー的な人々についてはこれまでもたくさんの先行研究で扱われてきた。ここでは、それらの先行研究を参考にして、彼らの行動原理や特徴について詳しく見ていきたい。これについて論じた著書に精神科医の斎藤環氏が書いた『世界が土曜の夜の夢なら ヤンキーと精神分析』がある。この著書ではヤンキー性の特徴について、「アゲと気合」、「個人主義の欠如」、「体当たり主義・反知性主義」、「女性性」、などを挙げている。(斎藤,2012)

「アゲと気合」とは何か。ヤンキー(本論文でいう残存ヤンキー)の言説や行動にはしばしば「筋を通す」や「仲間を裏切らない」といった倫理観がある。このような倫理観を斎藤は「気合」と呼びこの「気合」がヤンキー美学の中心にあると述べる。また、「アゲ」とは「気分が高揚する」という意味の言葉でこれも「ヤンキー」美学の中心にある(斎藤,2012,pp.35-41)。「アゲ」のように非日常的な感覚を根底に持ちながらも、「気合」により日常における倫理観も併せ持っているのだ。

また、「個人主義の欠如」も特徴の一つである。ヤンキーは「家族の大切さ」を至上の価値としている。彼らは権力による介入と抑圧を忌み嫌う反面、家族による拘束には嬉々として応じる。ヤンキーにとっては友、仲間、そして家族が何よりも大切なのだ。また、ここでいう家族とは主に彼らの両親に向けてではなく配偶者やわが子へと向けられたものである。自分と「夢」を共有しそれをはぐくんできた「絆」を重視するのだ(斎藤,2012,pp.143-144)。

さらにこの「夢」という言葉をしきりに使うのもヤンキー性の特徴である。また、「情熱」や「ぬくもり」など「熱」のこもった言葉もよく使われる。このような言葉が行き過ぎると、しばしば「反知性主義」に走ってしまう危険性があると斎藤は述べる。この主義のなかでは、行動は体当たり主義的であり、逆に緻密な予測と計算にもとづいて行動するような姿勢は一貫して軽蔑されるのだ(斎藤,2012,pp.130-142)。

「女性性」とは関係性構築においてである。もちろんヤンキーの見た目は暴力的で硬派なものであるが、彼らはとにかく「関係性」を大切にする。上下関係のみならず、異性と

の関係や、とりわけ家族を大切にしている傾向がある。斎藤は男性の欲望を「所有」、女性の欲望を「関係原理」としてとらえている。女性は結婚相手との関係を大切に育みながら、より理想的なパートナーへの成長を期待し、関係性のメンテナンスに重きを置く。この点においてヤンキーは「女性性」を持っている。彼らはパートナーとの絆を大切にしつつ、わが子をこの上なく愛する。またこの関係性は彼らの交友関係にも適応される（斎藤,2012,pp.168-185）。

また、「反学校の文化」や「上京・上昇志向のなさ」も彼らの特徴である。この二つについては相互に結びついていると考えられる。これについて、イギリスの労働者階級の青少年たちはなぜ労働者階級にとどまり肉体労働に向かうのかということについて論じたポール・E・ウィルスの『ハマータウンの野郎ども』でも記述されている。この著書の内容は要約すると以下のようなになる。

労働者階級の子供たちの多くが父親と同じような肉体労働に向かうのはなぜか。それは従来いわれてきたようにこの階級の子供たちは上位の階層の家庭の子供に比べ、学業の成績を伸ばすことが難しく、結果的に低賃金の仕事にしかありつけない、という理由からではない。むしろ彼らは自発的に肉体労働を選び取っているのだ。野郎どもは学校文化、また学校文化が表している価値規範を否定する。むしろ彼らは肉体労働に従事することで「ほんとうの男」たちの文化に憧れている。その文化には男尊女卑的で家父長制的な価値観や女々しさを否定する価値観がある。反学校文化はこうした肉体労働の世界にきわめて親和的であるため彼らは自発的に父親たちと同じような肉体労働の職業世界に入っていく（ポール・E・ウィルス,1996）。

つまり、「反学校」の文化に慣れ親しんだ彼らにとっては、「上京」や「上昇」のための勉強や、将来のことを考えた緻密な計算に基づく努力は彼らの文化と親和性のないものである。そのため、「上京」や「上昇」は彼らにとっては「蚊帳の外」の存在、もしくは彼らの行動規範に合わないある種の「敵」としてイメージされると考えられる。

以上に述べたヤンキー性、ヤンキー的なものの美学的特徴をまとめると、「アゲと気合」、「個人主義の欠如」、「体当たり主義・反知性主義」、「女性性」、「反学校文化」、「上京・上昇志向のなさ」などがあげられる。これがとても強く表れているのが、「残存ヤンキー層」である。しかし、部分的には「地元族」にも表れている。

2-4-3 阿南市の残存ヤンキーの特徴

2-4-1でも記述したように、阿南市の残存ヤンキーの特徴をまとめると「上昇・上京志向のなさ」、「ヤンキーであることの誇り」、「固定化した人間関係」、「10代から20代にかけての具体的な将来イメージ」、「地元志向」、「阿南市での暮らしへの肯定感」などがあげられる。

「ヤンキーであることの誇り」について、彼らは「ヤンキー」であることを誇りに思っ

ている部分がある。それを誇示するかのように成人式には金の袴やリーゼントなど派手な格好で参加する。また、普段のコミュニケーションでも彼らはあえてなまりの強い「阿南弁」を使う。さらに阿南市の椿地区の、だんじりどうしを激しくぶつけ合う伝統的な祭りである「ケンカだんじり祭り」には残存ヤンキーの若者が多数参加する。この祭りには椿地区以外からも残存ヤンキーたちが参加し、「ヤンキー性」の発散の場として祭りが機能している。このように阿南市において残存ヤンキーは「ヤンキー」であることを誇りに思い、「ヤンキー性」を持っていることを誇示する。なぜこのような状況が生まれるのか。この要因としては、阿南市においては「場」の数が少なく、中学時代に形成された「スクールカースト⁹」が更新されないまま続いていくためであると考えられる。

阿南市のような郊外型の地方都市においては、「残存ヤンキー」のスクールカーストが高くなるということが先行研究でも述べられている（堀博嗣,2015,pp.17）。このカーストが中学時代に形成されると、阿南市においてはこの関係性が大人になってもいつまでも更新されないまま続いていく。スクールカーストが高いということは、彼らが人気者であり、コミュニティの中で優越的地位を占めるということだ。

このような関係性が更新されないまま続いていくのは阿南市はあらゆる「場」の数が少なく、どこに行っても自分のことを知っている人が存在するからだ。阿南市においては中学以降の「場」の数は、都市部に比べて極端に少なくなる。阿南市の中学は 10 校あるが、高校の選択肢は実質的に 9 校しかない。徳島県には高校受験に学区制があり、また交通の便の悪さから学区外の高校に行くのはかなり難しい。そのため阿南市の中学生はこの 9 校から進路を選択せざるを得ない。学区制のない東京では約 400 校以上の選択肢があることを見ると、阿南市民はかなり限られた選択肢しか与えられていないことがわかる。そのため中学時代の人間関係はそのまま高校にまで引き継がれる。人間関係が引き継がれるということは中学のときに確立された「自己」や「スクールカースト」がそのまま、高校でもそれらに基づき同じような人間と交友関係が築かれる。

また、高校を卒業し、就職をしてもその関係性は固定化されている。なぜなら職場にも中学時代の知り合いや、知り合いの知り合いがかなりの確率で存在するからだ。実際に筆者の母校の阿南市立羽ノ浦中学校の 2009 年卒業生 120 名のうち約 10 名が現在日亜化学工業に勤務していることからこのことがわかる。そのような今までの自分を知っている人々が高い確率でいる環境では、関係性がいつまでも更新されず、残存ヤンキーたちはこのカーストにおいて上位にいるという潜在的な優越感をいつまでも感じ続けることになると考えられる。そのためいつまでも彼らが「残存ヤンキー」であることを誇りに思い、アイデンティティとして持ち続けるのだ。

また、この関係性のもと、「固定化した人間関係」は強固なまま 30 代、40 代と続いていく傾向にある。しかし、この交友関係には「リスク」もある。ある残存ヤンキーの男性は

⁹ スクールカーストとは日本の学校空間において生徒の間に自然発生する人気の度合いを表す序列のことである。

同じく残存ヤンキーの女性と20歳の時に結婚したが、2年後に離婚した。離婚理由は男性の側に非があるそうで、その後男性は仲間の中から「追放」状態にあるという。このように同質的で固定的な人間関係は濃密である分、大きなリスクを負っているといえる。

また彼らにとって特徴的なのは、十代の若いうちから自分の歩む二十代ごろまでの将来に対して、他の層よりも比較的具体的なイメージを持っていて、さらにそのイメージを高い確率で実現するということである。例えば、彼らは高校生のうちから将来は地元の工場などで働き、二十代前半のうちに結婚し、子供を設けるというライフコースのイメージを持っている場合が多い。この要因としては「ヤンキー」どうしの縦のつながりが挙げられる。彼らは上述した「祭り」の場などで、「ヤンキー」としてのアイデンティティのもと、年齢が違う残存ヤンキーともつながる。その場で彼らは「尊敬する対象」としての彼らの先輩の姿を見聞きし、自分の近未来の姿と重ね合わせる。そのため彼らは他の層よりも若い年代での将来イメージが具体的であると考えられる。また、ここで想定した将来イメージは「地元で就職し、20代の内に結婚する」といった、いたって「普通」のものである。そのため、彼らは高い確率でそのイメージを達成していく。

また、彼らにとっては「上京」や年収や学歴を上げる「上昇」といった思考は彼らの世界の外のものである。これは2-4-2でも述べたように、「反学校」の文化に慣れ親しんだ彼らにとっては、「上京」や「上昇」のための勉強や、将来のことを考えた緻密な計算に基づく努力は彼らの文化と親和性のないものであるからである。それに加えて阿南市の「製造業」の盛んさがこの意識に拍車をかけていると私は考える。先にも述べたが、阿南市においては全国に比べても「製造業」が盛んである。また、世界的にも名の知れた「日亜化学工業」が本社と工場を構える。そのため、「上京」や「上昇」をしなくても十分に阿南市で生活していけるという意識が生まれやすいのではないかと考える。

このように、中学以来続く狭くて深い関係性のもと、身近な先輩により形作られた「憧れ」を高い確率で達成してきた残存ヤンキーは結婚以降、とても「家族主義」的になる。子供の行事などには必ず出向き、通常は成人だけが出席可能な息子・娘の成人式にも出向いて写真を撮る姿が見られる。このような密接な家族関係の中では、子は親の影響を強く受け、「ヤンキー性」を帯びた気質は受け継がれていく。ヤンキー性は彼らにとっての行動原理であり、美学でもある。

このように中学時代にもっとも上のカーストに位置し、閉じられた世界の固定的な人間関係のなかでそのカーストは崩れないまま成長し、中学以来の「ヤンキー性」により、「仲間」と「家族」との関係をいつまでも大切にし、日々起こる事象には「体当たり」的に対処し、阿南市で生きる人生を肯定的に、楽観的に解釈し「日常」を生き続ける。

2-4-4 残存ヤンキーはどれほど幸せか、いかに生きればより幸せになれるか

ここからは残存ヤンキーが前野教授の導き出した幸せの四因子をどれほど満たしているかについて検討し、彼らの幸福度について考える。

(1)「自己実現と成長」の因子について、彼らの特徴としては先述した通り、残存ヤンキーどうしの縦のつながりにより、「将来イメージが明確であること」が挙げられる。ここでいう将来イメージとは早期に結婚し家庭を持ち、地元で生きていくというイメージである。この「将来イメージ」は特別なものではないため、達成率は高くなる。そのため、(1)の因子を高い水準で満たすことができる。

(2)「つながりと感謝」に関して、彼らは結婚が早く、また狭く深く仲間を大切にすることから(2)も満たしている。しかし、彼らのつながりはとても同質的なものであり、多様性はない。また、深く狭い人間関係のため、少しの亀裂がすべての人間関係を崩壊させるというリスクも負っているためこの因子の達成率は中水準であると考ええる。

(3)「前向きと楽観」に関して、彼らは阿南市での生活において、彼らの持つ「ヤンキー性」の気質のもと、ある種「体当たり」的に生きている。そのため、どちらかというところ「前向き」でポジティブに人生を送ることができていると考ええる。

(4)「独立とマイペース」については、彼らの築く交友関係は同質的なものであるため職業や生活環境に競争が生じ、差が生まれるようなことは少ない。そのため他人と比較することなくマイペースに生きることが可能であり(4)も満たしている。

そのため、各因子の達成度は、(1)は高、(2)は中、(3)は高、(4)高は高水準だと考えられる。彼らは四つの因子をいずれも高く満たしていて、とても幸せな人々であるといえるのではないだろうか。一方で彼らの課題としては「つながりと感謝」について、つながりが同質的すぎるという点である。そのため、残存ヤンキー的ではない新たな交友関係を築いてみるはどうだろうか。

3 残存ヤンキー層との対比でみる阿南市民の生き方・幸せ

3-1 エリート層

3-1-1 阿南市のエリート層について

阿南市のエリート層は主に大卒以上の学歴で地域の銀行や公務員として勤める。また地域の自営業主もこの層に入ると考える。阿南市全体で約2割がこの層に入ると考えられる。彼らにはヤンキー的な趣向は全く見受けられない。彼らは一度県外に進学し、徳島県に就職のため帰ってきた者も多く、交友関係は他の層と比べ幅広い。

Bさんはエリート層の典型的な例である。阿南市の中心部近くに生まれ、現在は徳島市内の農協に勤める。公立の小中学校を卒業後、市内に二つある進学校のうちの一つ（どちらも偏差値50後半程度）に進んだ。徳島県には学区制があるため、阿南市民には実質的に9校しか選択肢がない。また、徳島県の高校受験の倍率は2015年の入試で1.03倍ととても低い。同年の東京都の公立高校入試の倍率が1.50倍であるのと比べると、徳島県の高校受験の倍率の低さは顕著にわかる。Bさんも中の上の成績であったことからとりあえず地元の進学校へという思いで進学したという。

高校では特に目立つほうではなかったが学業面では高校の進学クラスに三年間入り続けた。高校卒業後は隣の県の国立大学に進学する。徳島県の進学校では国立大学の進学者数で競い合う雰囲気があり、また家庭の事情で近隣の国立大学への進学しか認めないという親も多い。就職活動については都市部での就職も考えたが競争率の激しさに嫌気がさし、地元での安定した暮らしに惹かれ、地元の農協へ就職した。

仕事や将来については、「将来のイメージはあまりわからない」と語り、仕事においては地元に貢献したい、自分のスキルを上げたいといった意欲はあまりなく、安定した暮らしが続くことを望んでいる。彼は「中学、高校、大学と学生のうちは次のステップに進むための目標が次々と迫ってきた。でも今はそのようなことがなく、毎日がただ通り過ぎていく」と語る。彼の日常の中には「目標」が欠如していることが見受けられる。

交友関係は中高の同級生や仕事の同僚などだが、いったん県外に出ていたため、中高の同級生では疎遠になった人も多い。地域の祭りや自治活動に関しては、ほとんど参加しない。彼の親は地域の掃除などには参加しているが、彼自身はほとんど参加せずその意欲もない。彼の住む地域は新興の住宅街であり、地域内の活動は「めんどくさいことが多そう」と敬遠する人が多いそうだ。

Bさんの両親は現在50代であるが、Bさんの両親も県内の金融機関に勤めるエリート層である。Bさんの父は地域の野球チームに所属し、比較的幅広い交友関係を構築している。これは職場の友人の紹介で加入したそうで、阿南市以外の人々も所属している。この層の人々は仕事などを通して比較的多様な人間関係を構築している場合が多い。そのため、その幅広い交友関係から、高齢者となっても幅広く興味関心を持ち、比較的多様な場にも出向いていく傾向がみられる。

以上、他の市民の話も含め特徴をまとめると、ホワイトカラー層の特徴としては「地区内で数少ない大卒者」、「自己実現イメージの希薄さ」、「比較的ネガティブな意識」などがあげられる。彼らの学歴は残存ヤンキー層と比べて高く、所得も安定している。しかし残存ヤンキー層のようにエリート層であるからと言って、そのアイデンティティにより強いつながりを形成するということはまれである。そのため、年齢の違うエリート層とつながり、「将来イメージ」を形成するといった機会も少ない。そのため「自己実現イメージ」が希薄なのではないかと考えられる。

また「比較的ネガティブな意識」については、彼らは仕事柄、阿南市や徳島県の経済状況について直視する機会が多いと考えられる。阿南市の商業については、年間の販売額はほぼ横ばいであるが、事業所数は年々減少傾向にある。ここから商店街などの小売店から大型のショッピングセンターに顧客が吸い取られているということがわかる。また、産業についても、製造業は全国と比べても盛んではあるが、その業績は低迷傾向にある。エリート層は自営業や公務員、地域の金融機関などに努めていることが多いため、仕事柄このような状況を直視し、「ネガティブな意識」が生成されるのではないだろうか。

付加価値額(実数)の推移

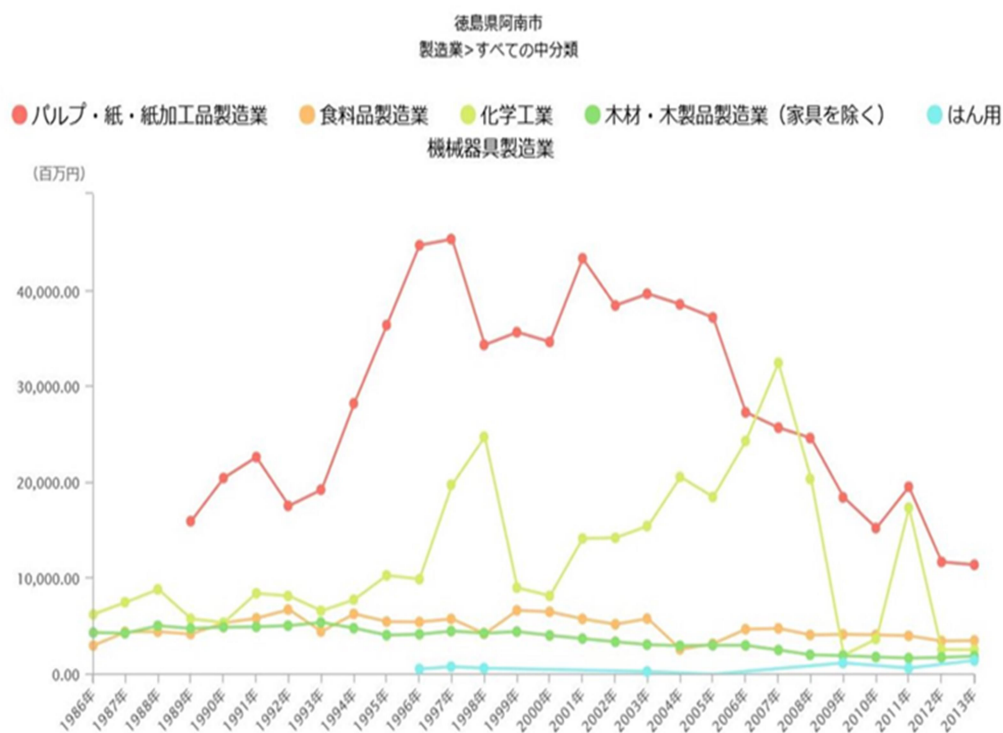


図 4 阿南氏の製造業の付加価値額の推移 RESAS より筆者作成

3-1-2 阿南市のエリート層はどれほど幸せか、いかに生きればより幸せになれるか

(1)「自己実現と成長」について、彼らは先述したように「将来イメージ」や「自己実現イメージ」が希薄である。また、地域の中での役割を持っているものも少数であり、かつ地位経済の衰退する現状の中では、地域や仕事などにおいて「実現したい目標」を見出すことができずにいると考えられる。

(2)「つながりと感謝」について、彼らはマイルドヤンキーに比べて地元にあまり強固な人間関係を築いていないという特徴がある。しかし、彼らは大学や職場などで多様な人と接したことから、他の層と比べ多様な人脈を持っている場合が多い。多様な人々との交友を築くことは、幸せに相関があることが示されている(前野,2013,pp.146)。

(3)「前向きと楽観性」について、彼らの仕事は公務員や地域の金融機関など地域の経済や産業と密接にかかわる仕事であるのに、止まらない人口減少や地域の衰退などにより、仕事を通じて地域の衰退を実感する機会が多いと考えられる。そのため、ポジティブな感情を抱きにくいと考えられる。

(4)独立とマイペースについて、彼らは他の層と比べて大学などで多様な人々と交流している分「広い世界」を知っている。そのため、より高年収の都会で働く知人などと自分を比較してしまう、社会的な比較思考が生まれると考える。それらの感情は「マイペース」な意識を阻害し、社会的な比較思考を発生させ、幸福度を下げると考えられる¹⁰。

そのため、各因子の達成度は、(1)は中、(2)は中、(3)は低、(4)は低水準だと考えられる。しかし、所得の面でいえば、彼らが就く職業の所得は他の層よりも100～200万円ほど高い。つまり、彼らの生活自体は阿南市の中でもかなり安定していると考えられる。そのため、貧困に陥る危険性などは低く、生き方次第で幸せの四分子を満たす前提条件は整っていると考えられる。

では、彼らはいかに生きていけばより幸せに生きられるだろうか。私は彼らの生き方の方向性として「地域の中で専門性を発揮したり、地域のリーダーとして力を発揮したりする生き方」を提案したい。たとえばPTAの役員や自治会の長などを率先して務める生き方である。彼らは地域の中でも比較的希少な大卒者であり、彼らが持っている能力を地域の中で発揮できれば「自己実現と成長」、「独立とマイペース」因子を満たしていけるのではないだろうか。また自分の能力が発揮されることで「前向きと楽観性」も向上していくと考える。

¹⁰ Frey & Stutzer,2006

3-2 地元族

3-2-1 阿南市の地元族について

見た目はいたって普通で内面に若干の「ヤンキー」性は持っているが、残存ヤンキーほど強くはない。進学や就職に関して上昇志向は低く、主に地元の工業高校や偏差値 50 前後の普通科高校に進学し、卒業後は医療系の専門学校や地元の製造業の工場などに勤めるケースが多い。結婚も比較的早く二十代のうちに結婚するものがほとんどである。交友関係については地元の中学時代のスクールカーストをそのまま引きずり、同質的な交友関係を築いている傾向がある。阿南市民の約三割がこれにあたると思われる。

Cさんは地元族の典型的な例である。彼の父は地元では有名な製造業の工場に努め、母は専業主婦、彼自身は四人兄弟の次男である。中学のころからそれほど目立つほうではなかったが友達が多く、地元の高等専門学校に進学した。卒業後は父親と同じ企業の工場に勤める。彼の中学の同級生も十人ほど同期として入社しており、先輩後輩にも知り合いは多数いる。卒業後、阿南市での暮らしを選んだ理由は「なんとなく住みやすいから」だそうだ。彼によると「東京は住みにくい」、「遊びに行くのはいいが生活は無理」と述べる。また現在の仕事を選んだ理由としては「地元で有名」だからで、あまり深く考えず決めたようだった。

しかし、彼からは「漠然とした不安」が垣間見える。彼の職場は地元では有名な大企業であるが、工場での仕事は腰を悪くする人、また人間関係や交代勤務のつらさなどでやめていく人も多い。彼の話では同期で約 200 人が新卒で入社するが、約四分の一が半年で仕事を辞めていくそうだ。会社の業績も下がっていて「60 歳まで働くイメージはあまりわからない」と不安を口にする。会社を辞めた人は同業種の製造業の企業に就職する人もいれば、まったく関係のない企業に就職する人もいる。このように漠然と危機感を感じているものの、将来に向けてスキルアップをしていこうといった姿勢はほとんど見られない。

また、結婚後の主要な場として「家庭」があるが、残存ヤンキーのように積極的に家族の写真を SNS に投稿するような姿はあまり見られない。家族とのかかわり方も残存ヤンキーほど濃くはない。

彼らの特徴をまとめると、残存ヤンキーと同じ点としては、「固定化された人間関係」、「地元志向」、などが挙げられる。一方で残存ヤンキーと異なる点としては、彼らは残存ヤンキーほど人間関係が強固ではない。残存ヤンキーがヤンキーであることにアイデンティティを持ち、残存ヤンキーの先輩、後輩とも人間関係を形成するのに対し、彼らは「地元族」であることについて、特に誇りもアイデンティティも持っていない。そのため、残存ヤンキーにみられるように成人式でおそろいの袴を着たり、名前入りの旗を作ったりといった行動は見られない。また残存ヤンキーと異なる点は、地元族には「漠然とした不安」や「主体性のなさ」も特徴として挙げられる。

「漠然とした不安」はなぜ生まれるのか。先述したように、阿南市の製造業は全国に比べても非常に盛んであるが、近年では業績が下がっていて、入社してからこの事実が気が

付くものが多い。このような状況に直面しているのは残存ヤンキー層も同様であるが、彼らは「ヤンキー性」という確固たる行動原理を持っている。一方、地元族は彼らのような行動原理をそれほど強く持っていないため、心のよりどころが不安定であり「漠然とした不安」に付きまといわれるのではないかと考えられる。また、「主体性のなさ」については阿南市民に広く共通してみられる特徴であるため後に記述する。

3-2-2 地元族はどれほど幸せか、いかに生きればより幸せになれるか

(1)「自己実現と成長」について、彼らにとっては人生の中での目標やなりたい自分のイメージが明確ではない場合が多い。「なんとなく」や「みんなそうだから」といった主体性が欠如した状態にある。そのため「実現したい自己」がかけた状態にあると考えられる。

(2)「つながりと感謝」については、中学時代のスクールカーストをベースに人間関係が構成されているが、彼らの人間関係は残存ヤンキーほど強くない。残存ヤンキーが成人式に仲間の名前入りの旗を作ったり、車の改造仲間の中でチーム名をつけたりするのに対し、地元族はそういったことは行わない。そのため(2)に関しては残存ヤンキーほど強くないと思われる。

(3)「前向きと楽観」に関しては、先述した通り彼らは地元での仕事や暮らしなどについてあまり、「主体性」がなく、また、昨今の製造業等の業績の低迷から「漠然とした不安」におおわれているように見受けられる。そのため、残存ヤンキーと同じような仕事をしていても現状に対する肯定感は低くなると考えられる。

(4)「独立とマイペース」について、彼らの交友関係は残存ヤンキーと同じく同質的なものであるため比較思考が現れず、マイペースに生きることは可能である。しかし、独立という点では、残存ヤンキーが「ヤンキー」として自己を確立させているのに対し、彼らは「地元族」としてアイデンティティを確立しているわけではない。そのため(4)に関しても残存ヤンキーほど強くないと考えられる。

そのため、各因子の達成度は、(1)は低、(2)は中、(3)は低、(4)は中だと考えられる。彼らが幸福度をより高める生き方をするためにはどうすれば良いだろうか。上で述べたように「つながりと感謝」や「独立とマイペース」は特に問題のない水準であると考えられる。そのため方向性としては「自己実現と成長」と「前向きと楽観」を向上させる必要がある。そのためには日常生活のなかで目標やなりたい自分を明確にすることが必要である。阿南市の加茂谷地区や椿地区では彼らにとっての目標が「地域を盛り上げる」ことと結びついている好例もある。またそういった活動をしていくことで「前向きと楽観」も向上していくのではないだろうか。

3-3 非つながり層

3-3-1 阿南市の非つながり層について

Dさんは非つながり層の典型的な例である。中学時代から目立つほうではなく、学校も休みがちであった。隣の市の普通科高校に進学後、地元の製造業の企業に就職したが、人間関係に問題が生じ、二年で退職した。彼によると、仕事を辞める人のほとんどは人間関係に問題が生じ辞めていくそうだ。地元で根差した企業であるが、大量採用・大量離職といった流れは長年続いているらしい。その後、非製造業の職に非正規社員として務める。将来に関しては「先が見えない」と彼は語る。月の手取りは12万円で正規採用される見通しは立たない。製造業での職歴を活かし、同業種の職を現在ハローワークで探しているそうだ。交友関係は中学を休みがちになって以来以前の友人との関係も希薄になってしまい、休日の予定もない。

また、年老いてから家族や友人とのつながりが切れてしまい、誰ともつながりを持たなくなった人も近年では増加している。阿南市の孤独死率（一年間に一人当たり何人の孤独死があったか）をみると1977-79年では2.00であったのが、1980-84年では3.07、1985-89年では2.96、90-94年には3.21と上昇傾向にある。

阿南市においては、一度人間関係について失敗してしまうとかなり大きなダメージとなる。一度関係が崩れてしまうと、その噂が地区内に広まってしまうこともある。その状態から、再度関係を構築しようとするのは難しい。また、新たに人間関係を構築しようとしても、阿南市において新たに人がつながれる場合は、高齢者向けのものはあるが、若者・青年向けの場はほとんどない。そのため、「つながり」を新たに構築することも難しい。さらに、後述するが阿南市においては主体的に何かを始めようとする意識の生成を阻害する構造があり、そのような中では何かにチャレンジしてみようという意識にもなりにくいと考えられる。

3-3-2 非つながり層はどれほど幸せか、いかに生きればより幸せになれるか

(1)「自己実現と成長」に関して、彼らは生活のなかで目標やなりたい自分のイメージが欠如している。仕事について状況を好転させるのは難しいとしても、それ以外に何か彼らの「趣味」や「興味」の発揮の場があれば「自己実現と成長」の因子も達成されていくが、阿南市においてそのような場はほとんどない。

(2)「つながりと感謝」に関して、地元での中学・高校時代からの交友関係が切れてしまっている場合はほかの場で関係を構築することは難しい。また、一度人間関係に不和が生じると、地域の中でそれが広まってしまうこともある。さらに新しく人々が降雨有関係を構築する「場」は高齢者向けのものはあるが、それ以下の年代の人々が新たにつながりを構築する「場」はほぼないため、新たなつながりも作りにくい。

(3)「前向きと楽観」に関して、彼らは所得の低さや人間関係の希薄さから、「前向き」にはなれないと考える。

(4)「独立とマイペース」に関して、彼らは精神的なよりどころがなく、確かな自己も確立できていないためこれに関しても低いと考えられる。

そのため、Dさんのようなタイプの非マイルドヤンキー層の各因子の達成度は、(1)は低、(2)は低、(3)は低、(4)は低水準だと考えられる。彼の幸福度の向上にまず必要なのは身近な「目標」とそれを支える交友関係である。この目標については仕事でなく、趣味など何でもよいと考える。そのため、自分が興味を持って、また自分のことを知っている人が少ない「場」に出向いてみることを提案したい。今までの自分を知っている人が少ない場では、今までの自己に引きずられず、大胆に行動ができるのではないだろうか。そのような場で、新たに交友関係を築き、目標をもって活動してみると四因子を向上していけるのではないかと考える。

3-4 移住者

3-4-1 阿南市への移住者について

阿南市への移住者については、まず積極的な理由で移住してきたタイプの人について記述する。阿南市椿地区の地域おこし協力隊である助田さんは「積極的移住者」の典型例だ。彼の両親は阿南市出身であるが、彼自身は関西の出身だ。大学卒業後一度は会社員として働いたが、2016年四月から椿地区の地域おこし協力隊として活動している。活動内容は農業振興、観光開発、地域情報の発信など、地域に密着した活動を多岐にわたり展開している。「最初は住民の中になじむのは大変だった」そうだが今では地域のパイプ役として地域住民を巻き込み、地域活性の各種イベントを企画したり、住民の交流を促進したりと活躍している。椿地区での生活について彼は「とても充実している」と話す。この地区での暮らしは「都会では満たされない気持ち」が満たされ、「無理せず生きることができる」そうだ。地域おこし協力隊の任期は三年で、そのあとは椿地区でカフェを開くことを目標にしている。

また、彼のほかにも加茂谷地区などには農業に従事するために移住者が増えたり、積極的な目的意識を持った移住者が増えたりしている地域もある。この地区は750世帯ほどが住むが、近年11家族が移住してきたり、移住者が中心となってイベントを作りあげたりと賑わいを見せている。しかし、このような積極的な目的意識を持った移住者は数少ない。

次に消極的な移住者について記述する。Eさんは徳島市にある企業に勤務する30代の男性だ。地元は徳島県の西部で阿南市からは車で60分ほどのところにある。これまでは徳島市内のアパートで独り暮らしをしていたが、結婚を機に阿南市内に一軒家を建て移住してきた。阿南市の北部にあたる羽ノ浦地区では徳島市のベッドタウンとして1975年に春日野団地がつくられ、急速に人口が増えた。近年も山の斜面を利用した新しい住宅団地が作られている。Eさんの住む地域も新興の住宅街であり、地域の自治会などはほとんど機能していない。しかし、Eさん自身は特に今の生活に不満はないという。彼自身は家庭と仕事で十分満たされていて、友人も地元で居て会いに行けるので特に地域の中でつながりを形成し

たいとも思わないようだ。

阿南市への転入者をみると約半数が徳島県内からの転入者である。そのため、交友関係を持続させ、日常的に会うことも可能な人が過半数であると考えられる。このような状況では地域の中でつながりを形成したり、主体的に何かを始めたりといったモチベーションは働かないだろう。しかし、Eさんのように若くて健康な状態であれば何の不自由もなく生きていくことは可能であるが、年老いてくると状況は変わってくるだろう。3-3-1でも取り上げたが阿南市での孤独死の割合は増加傾向にある。

従業・通学地別の就業者・通学者数

区分	阿南市から他市町村へ				他市町村から阿南市へ			
	総数	構成比	就業者	通学者	総数	構成比	就業者	通学者
総数	8,204	100.0%	8,061	1,081	8,324	100.0%	7,478	846
徳島市	4,039	49.2%	3,485	554	3,004	36.1%	2,839	165
小松島市	2,355	28.7%	2,091	264	2,592	31.1%	2,274	318
那賀町	498	6.1%	453	45	486	5.8%	438	48
美波町	291	3.5%	291	-	537	6.5%	439	98
勝浦町	200	2.4%	170	30	296	3.6%	247	49
鳴門市	176	2.1%	163	13	169	2.0%	143	26
松茂町	74	0.9%	74	-	62	0.7%	57	5
北島町	62	0.8%	61	1	126	1.5%	120	6
牟岐町	52	0.6%	52	-	104	1.2%	76	28
海陽町	45	0.5%	41	4	105	1.3%	94	11
その他	196	2.4%	187	9	586	7.0%	497	89
計	7,988	97.4%	7,068	920	8,067	96.9%	7,224	843
香川県	52	0.6%	46	6	19	0.2%	19	0
その他	164	2.0%	119	45	238	2.9%	235	3
計	216	2.6%	165	51	257	3.1%	254	3

(平成22年国勢調査)

(他市町村への従業・通学者のうち不詳は除く)

図5 従業・通学地別の就業者・進学者数 『阿南市人口ビジョン』より

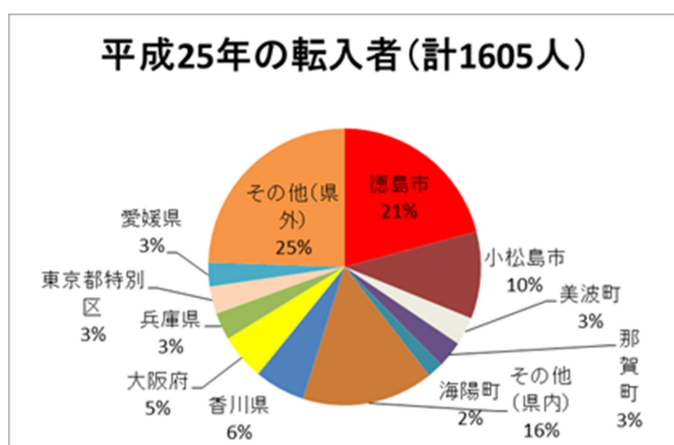


図6 阿南市への転入者の割合 『阿南市人口ビジョン』より

3-4-2 移住者はどれほど幸せか、いかに生きればより幸せになれるか

助田さんのように積極的に阿南市に移住してきた人々について考える。

(1)「自己実現と成長」に関して、彼らは阿南市の中で生きる中でのしっかりとした目標を持っている。彼の場合は地域の活性化だが、他の人々においては農業や地域に密着した飲食店の開業など、自分たちのやりたいことが明確である。

(2)「つながりと感謝」に関して、加茂谷地区や椿地区などでは地域の人々が積極的に彼らを受け入れ、また彼らも積極的に地域の人とつながりを形成しようとする傾向がある。

(3)「前向きと楽観」に関して、彼らにとって以前と比べて阿南市での生活での所得は低くなっていることが多い。特に図で示したように農業での所得はとても低くなっているが、彼らはそれを受け入れたうえで阿南市での生活を選んでいるため悲観的になることは少ない。

(4)「独立とマイペース」に関して、彼らが阿南市で送る生活は都会のそれとはまったく違った価値基準に基づくものであり、都市部の生活などと比較したりする志向には陥らないと考えられる。

そのため、彼らのようなタイプの積極的移住者の各因子の達成度は、(1)は高、(2)は中、(3)は高、(4)は高水準だと考えられる。残存ヤンキー層とは全く違った生き方であるが、幸福学に照らし合わせて考えてみると、積極的移住者もとても幸福度の高い生活を送っていると考えられる。彼らのような人々のこれからの生き方としては、持続的に現在の状態を維持し、さらに地域の人々を巻き込んでいくことが期待される。

一方で消極的な移住者について考える。

(1)「自己実現と成長」に関して、彼らは阿南市の中で生きる中でのしっかりとした目標は特に持っていない。そのためこの因子の達成度は、積極的な移住者や残存ヤンキーに比べて低くなることが考えられる。

(2)「つながりと感謝」に関して、仕事やライフステージの移行により阿南市に移住して来た人の多くは新興のベッドタウンに居住しており、そのような地域では地域の中でのつながりはほとんどない場合が多い。しかし、彼らの地元などでつながりを持っている人は特につながりが必要としていない人も多い。しかし、阿南市の孤独死率の高まりから、地域内でのつながりの必要性は歳をとるごとに増していく。

(3)「前向きと楽観」に関して、彼らが前向きであるがどうかは人それぞれであり一概には言えない。しかし、地域での暮らしにおいてかれらは、残存ヤンキーのように独特の行動原理を持っているわけでもなく、積極的移住者のように高い目的意識を持っているわけではない。

(4)「独立とマイペース」に関して、彼らが阿南市に居住しているのはあくまでもベッドタウンとしての価値を見出しているからである場合が多く、積極的移住者のように阿南市ならではのライフスタイルの価値を見出しているわけではない。

そのため、この消極的移住者の各因子の達成度は、(1)は低～中、(2)は低～中、(3)は低～

中、(4)は低水準だと考えられる。彼らについて一概に共通して言えることは少ないが、一つ共通しているのは、地域の中でのつながりを持たない人が多いということである。若くて健康な状態であると地域の中でのつながりを持たなくても何も不自由はないかもしれないが、年老いた時のセーフティネットとしてつながりを形成する必要性がある。また、親密で多様な交友関係により「つながりと感謝」を達成することで幸福度を上げていける可能性がある。また、阿南市においては知り合いの紹介から趣味の場などへの参加が広がるケースが多く、こうすることで「自己実現と成長」に必要な日常の中の目標や活動につながることも考えられる。そのため、例えば公民館が主催するイベントやサークル活動などから交友関係を広げていくことを提案したい。

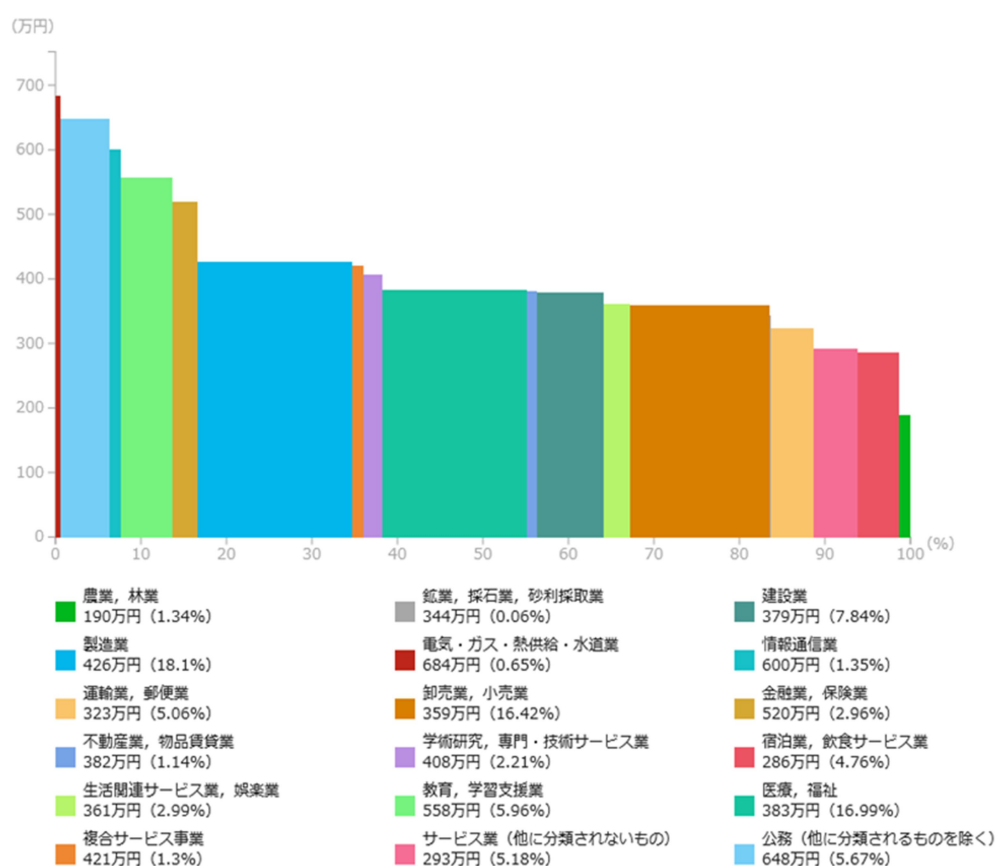


図 7 徳島県民の一人当たり現金給与総額（2012） RESAS より筆者作成

3-5 阿南市内部での地域への意識・人とのつながりの違い

3-5-1 中心部と周辺部の構造的違い

ここからは阿南市の中心部と周辺部の構造的違いにより生み出される「生き方」の違いについて記述する。この「生き方」の違いは市民の幸福度の違いにもかかわってくると考える。

阿南市の中心部である富岡地区や比較的人口の多い羽ノ浦地区や那賀川地区、見能林地区と周辺部の椿地区・加茂谷地区・大野地区・桑野地区などでは住民のタイプや生き方が異なっているところも多い。市民の職業を見てみると中心部の富岡地区や人口が多い羽ノ浦地区や那賀川地区、見能林地区では「専門・技術」、「事務」、「生産工程」などが多くなっているのに対し、周辺部である加茂谷地区や椿地区、大野地区、桑野地区では「農林漁業」が多くなっている。また、中心部・比較的人口の多い地区では共同住宅（アパート・マンションなど）で共住している割合が2割ほどに達しているのに対し、周辺部では1パーセントほどである。

この違いから、阿南市の周辺部である加茂谷地区や椿地区、大野地区では職と住が近接していて、土着的に地域に住んでいる割合が高いことがわかる。一方で中心部や比較的人口の多い地区では住民が流動的で、住まう地域と職が分離している傾向にあることがわかる。このような違いは市民の「地域」にまつわる意識や人とのつながりにも違いを生み出している。

	主世帯	一戸建て	長屋建て	共同住宅	その他
富岡地区	4006	2778	166	1049	13
見能林地区	3915	3043	16	853	3
長生地区	1073	815	44	214	-
桑野地区	1276	1234	25	16	1
加茂谷地区	674	664	1	7	2
大野地区	761	745	4	9	3
中之島地区	1671	1265	108	295	3
宝田地区	971	771	106	90	4
橋地区	1109	804	19	284	2
椿町	604	590	4	8	2
福井地区	756	709	24	20	3
新野地区	1187	1124	40	19	4
那賀川地区	3796	2975	72	738	11
羽ノ浦地区	4367	3475	129	758	5

図8 阿南市の住宅の種類 平成二十二年度国勢調査から作成

	総数	管理	専門・技術	事務	販売	サービス	保安	農林漁業	生産工程	輸送・機械運転	建設・採掘	運搬・清掃・放送等	分類不能
富岡地区	4458	161	713	748	533	489	57	117	836	200	212	227	165
見籠林地区	4804	111	740	786	529	489	45	185	876	320	257	238	228
長生地区	1367	25	188	191	116	127	12	98	323	52	107	62	66
桑野地区	1843	31	221	236	176	165	13	290	344	70	106	112	79
加茂谷地区	1094	16	109	142	78	76	7	279	177	29	49	49	83
大野地区	1146	23	133	139	105	90	13	215	197	36	67	62	66
中之島地区	2010	33	316	365	152	194	17	136	369	81	103	119	125
宝田地区	1311	21	180	233	120	145	9	74	285	29	63	78	94
樺地区	1336	37	127	173	133	128	13	97	258	130	89	92	59
樺町	891	13	50	76	41	63	7	417	95	29	41	44	15
福井地区	1122	23	106	135	102	95	14	170	193	46	57	60	121
新野地区	1883	33	216	228	141	149	15	339	369	39	122	82	150
那賀川地区	4831	99	760	742	500	486	56	399	977	153	241	250	168
羽ノ浦地区	5585	86	1007	888	719	647	83	226	993	218	252	280	186

図9 阿南市民の就業種類 平成二十二年度国勢調査から作成

3-5-2 地域への意識やつながりの違いについて

地域の中でのつながりについては阿南市の中心部や人口の多い地区と周辺部では違いがある。中心部や人口の多い地区では住民の土着性も低く、また住民の流動性も高いため周辺部ほど住民同士のつながりは強くない。また、地区内の組織においても、「アパートの人はすぐに出ていくから」という理由から組織に所属しない傾向があり、一軒家の住民との交流の乖離がある地区もある。

一方、地域への意識について特徴的なのは、周辺部である「加茂谷地区」や「樺」地区では地域の人々の「地域」への意識が高い。加茂谷地区は阿南市の西部に位置し、農業が盛んで一年を通して十数種類の農作物を生産している。この地区は750世帯ほどが住むが、近年11家族が移住してきたり、地域の住民が一丸となってイベントを作りあげたりと賑わいを見せている。また、地域住民全体にも「加茂谷に人を呼び込みたい」という意識が浸透し、地域全体でまちを盛り上げようという意識がある。

また、樺地区も同様の動きを見せている。樺地区は阿南市の南東部に位置し、北から東は海に面する。約600世帯ほどが住むが、近年住民主体で地域活性化のための活動が生まれている。地元の漁師らが2012年に結成した「魚っSUN's」は魚の普及を目指すことで樺地区に人を呼び込みたいと活動を続けている。また40・50代の女性を中心に「樺ママドル」を結成し月に一回マルシェを開催している。

しかし、同じく周辺部である桑野地区と大野地区ではあまりこういった動きは見られない。この違いを生む要因としては「リーダー・パイプ役の存在」、「意識の共有・統一」、「情報発信」が挙げられると考える。地域の住民の意識を加茂谷地区には「加茂谷元気なまちづくり会」という地域の活性化を目的に結成された団体があるが、その団体の会長がとて

も精力的に動き、地域の中での合意形成や総意を地域に向けた。また、椿地区には地域おこし協力隊が置かれており、彼が住民の間のパイプ役として住民間を結び付け、地域住民間のモチベーションを高めている。椿地区の地域おこし協力隊助田氏によると「地域を盛り上げたい」といった意識は地域の人々の間にあったそうだ。しかし、地域の中で誰かがリーダーシップをとることを避ける意識やしがらみがあり、住民間の意識が統一されていなかった。そのため、外部からきた「よそ者」として助田氏が地域のしがらみなく「パイプ役」を務め、地域への意識が統一されつつある。また地域での活動を積極的に SNS など で発信している点も特徴としてあげられる。

3-6 「主体性のなさ」や「現状を変えようとしなない意識」を構成する構造

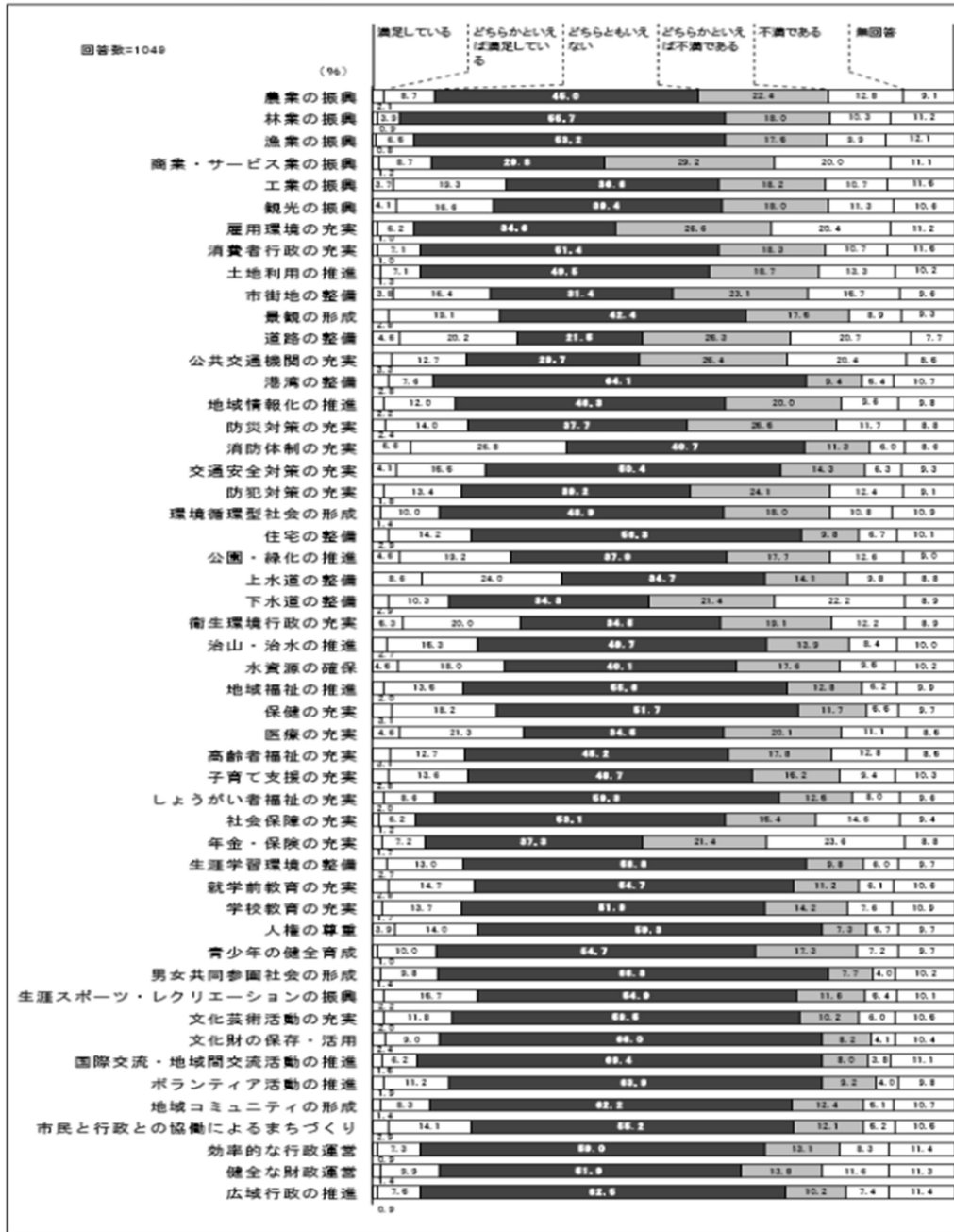
3-6-1 阿南市民に蔓延する意識

ここまでの記述で阿南市民、特に阿南市で生まれ育ってきた人々には広く共通して「主体性のなさ」や「現状を変えようとしなない姿勢」がみられることが確認されたのではないだろうか。もちろん一部のホワイトカラー層のように地域の変革のために尽力する人や、過疎地域で新しい生き方を志向し、生き生きと暮らす人もいることは確かに確認できる。

しかし、インタビュー調査で目立ったのは「なんとなく」や「みんなそうだから」といった言葉だった。また、平成二十年に八月に、二十歳以上の阿南市民に実施し、1049 名から回答を得た「阿南市民まちづくり意識調査」には阿南市民のこういった意識が表れている。調査では「市の各施策に対する満足度」についてはどの項目も「どちらともいえない」が多数を占めている。一方「阿南市で住みたい」と答えた市民の割合は 83.2%、「愛着を感じている」と答えた市民の割合は 80.5%となっていた。「愛着を感じ」、「住みたい」と答えるなら、「市の各施策」の満足度も高くなるはずであるが、そうではない。ここからも主体的に自分の生きている世界にかかわろう、変えていこうという姿勢のなさが見える。

この「主体性のなさ」や「現状を変えようとしなない意識」は幸せについて考えるうえでとても重要である。なぜなら、「幸福学」の理論に沿って考えると、市民がより幸せになるためには新たに人生の中で目標を見つけたり、新しく人とのつながりを形成したりすることが重要であるからである。そのため、この状況に陥る原因を以下では考察する。

市の各施策に対する満足度（全体）



市の各施策に対する満足度 平成 20 年『阿南市民まちづくり意識調査』より

3-6-2 意識を形成する構造的要因

こういった意識や態度が形成される要因を考えるうえで、「日常生活世界はいかにして構成されるか」をテーマとする現象学的社会学を提唱したシュッツの理論を参考にしたい。彼の理論によれば、目の前に広がる世界の存在を自明のこととして疑わない素朴な日常の態度のことを「自然的態度」という。そしてこの「自然的態度」の構成要因は二つあり 1 「同列性の理念化」と 2 「反復可能性の理念化」に分けられる。1 「同列性の理念化」とは過去の経験において妥当であったことは、反証が出現しない限り、将来においても妥当性が継続される過程を言う。また 2 「反復可能性の理念化」とは日常生活世界で今まで自分の行為で達成した事柄は、同じような状況においては反証が出現しない限り、未来においても反復して達成が可能だろうという期待を意味する。これらの仮定は絶対的なものではなく、これらに対する人々への疑問や反証などの問題が発生し、その問題が解決されると新しく自明性が与えられた世界へ回帰する。(下田直春,1987,pp.88-90)

3-6-3 「人、モノ、サービスの少なさ」による「反証」の少なさ

この理論を参考にすると、「主体性のない現状の受け入れ」を行う多くの阿南市民の「日常生活世界」を構成する要因はいくつか考えられる。一つの要因としては多様な人、モノやサービスの少なさ挙げられる。

多様な人、モノ、サービスの少なさについては、阿南市と荒川区の幸福度調査の比較の項目でも示したが、サービスや施設の充実を実感していると答えた割合は荒川区の方が阿南市より 10 パーセント以上高くなっていた。このことから、阿南市民が多様な人、モノ、サービスに触れられていないのは明らかである。このことから考えられるのは、阿南市民の「主体性のない現状の受け入れ」は、子ども時代に多様な人、モノ、サービスに触れられていないことからくるということだ。つまり、それらの存在が少ないことで、阿南市においては自分たちの見ている「世界」への「反証」がほとんど起こらない。そのため彼らがおかれている「職業の選択肢の少なさ」や、「努力しても未来は変えられない」といった事実や意識を自明のものとして受け入れ続けてしまうという構造にあるのではないだろうか。

また、これを裏付ける調査結果もある。ベネッセ教育研究開発センターが実施した「若者の仕事生活実態調査」(2006年)では、子供の頃に多様な大人と触れあう経験が職業生活の充実にとって重要な役割を果たしている可能性を示している。調査の結果では、「親や学校の先生以外の大人と話をすること」などの経験を有している者は、「将来の目標を持って仕事をする事ができている」と回答した者の割合が、「できていない」と回答した者の割合に対して 16.5%高くなっていた。このことから「経験の少なさ」が「主体性のなさ」や「目標の欠如」を生んでいるということが言えるのではないだろうか。

3-6-4 製造業の盛んさが形成する「主体的」でなくとも成立する「日常」

また、阿南市の産業における製造業の存在感も要因の一つではないかと考えられる。阿南市には日亜化学工業の本社と三つの工場があり、数千人の雇用を生み出している。日亜化学工業は1956年から阿南市に本社を置き発光ダイオードなどの電子デバイスや蛍光灯などに使われる蛍光体を開発、製造してきた。阿南市に払う固定資産税などにより財政への貢献度も高い。また地元の高校や部活動からは毎年何人を採用するといった採用の枠が代々続いており、数十年にわたり市民の雇用に貢献してきた。また、上記したように阿南市の基幹産業は製造業であり、全国の地域と比べても盛んである。

確かに、「2-4 地元族」の項でも記したように、近年では製造業の業績は衰退傾向にある。実際に働いている人の中ではその実感も垣間見える。だが、阿南市と荒川区の幸福度調査の項目でも取り上げたが、荒川区では「地元の企業（お店や町工場）は元気で活力がある」と実感している人の割合は8.4パーセントなのに対し、阿南市では22.4パーセントの人が阿南市の企業の活力を実感している。この結果から、依然として一般の阿南市民は他の地域と比較しても地域の産業に楽観的な見方をしている傾向が強いことがわかる。

以上の事実から考えられるのは、地元が強固な「就業の場」や「産業の基盤」があるため、「主体的に自分の世界を切り開いていこう」とする意識が育たないのではないだろうか。このような中では、「主体的」でなくとも「日常」はある程度担保されるためその状態を受け入れるのだ。

3-6-5 固定化された人間関係と場の数の少なさによる「新しい私」になることの阻害

阿南市民の特徴としてあげられるのは「同質的」、「固定的」な交友関係、また阿南市の特徴として「場」の数の少なさがあげられる。阿南市においては「場」の数が少なく、どこに行っても昔からの知り合いがいるため、中学で決定された「自己」による「私」がどこに行っても更新されず、同質的で固定的な人間関係が続く。このような構造は「主体性のなさ」や「現状を変えようとしめない姿勢」に影響を与えていると考えられる。

阿南市においては中学以降の「場」の数は、都市部に比べて極端に少なくなる。阿南市の中学は10校あるが、高校の選択肢は実質的に9校しかない。徳島県には高校受験に学区制があり、また交通の便の悪さから学区外の高校に行くのはかなり難しい。そのため阿南市の中学生はこの9校から進路を選択せざるを得ない。学区制のない東京では約400校の選択肢があることを見ると、阿南市民はかなり限られた選択肢しか与えられていないことがわかる。そのため中学時代の人間関係はそのまま高校にまで引き継がれる。人間関係が引き継がれるということは中学のときの「自己」がそのまま高校でもその「自己」に基づき同じような人間と交友関係が築かれる。

また、高校を卒業し、就職をしてもそのまま「キャラ」は固定化される。なぜなら職場にも中学時代の知り合いや、知り合いの知り合いがかなりの確率で存在するからだ。実際

に筆者の母校の阿南市立羽ノ浦中学校の2009年卒業生120名のうち約10名が現在日亜化学工業に勤務していることからこのことがわかる。そのような今までの自分を知っている人々が高い確率でいる環境では「全く新しい私」になることは難しい。また、職場以外の人が集まるコミュニティにおいても、誰も自分の知り合いがいないといった場は数少ない。

こうした構造から、阿南市のマイルドヤンキーたちは中学時代に形成されたスクールカーストによる「キャラクター」が更新されないまま生活せざるをえない。また、このような中では市民の「主体性」を発揮するのを阻害する。なぜなら、彼らが何か意思を持ち行動しようとしてもとたんに自分の「自己」に適合しているかを気にしてしまうからだ。その結果、「現状」のままを「不安」や「不満」を持ちながらも受け入れてしまうという構造にあるのではないだろうか。

また、2-2で紹介した「ナラティブ」の考え方に即して考えてみる。中学時代に形成されたスクールカーストの中で主に主体性を発揮する「リーダー」は主に「残存ヤンキー」である。阿南市においてはその「リーダー」の役割が固定的であり、この構造が残存ヤンキーや一部の他の層以外は何かに主体的にならなくても世界は進んでいくという人生に対する一貫した解釈を生んでいるのではないだろうか。このような固定的な人間関係と役割意識が「主体性の欠いた物語」を阿南市民の中に生み出しているといえる。

4 市民の「内的」な幸福度を高めるためのまちづくりとは

4-1 「幸福」にまつわる阿南市の課題

ここからは、阿南市の現状と課題を踏まえて、幸福の四因子を達成していくためのまちづくりについて考察していく。そこで4-1では市民の幸福度を高めていくうえで、現状の課題として考えられるものを挙げていく。

まず、人口については、阿南市でも将来的に人口が減少していくことは避けられない。「阿南市人口ビジョン」では2015年に約75000人の人口は2060年には趨勢人口で約46000人にまで減少することが予想されている。また、図に示した通り75歳以上の高齢者の割合が増えていくことが予想されている。そのため、幸せを達成する大前提として人口が減っても持続が可能な地域を作り上げていく必要がある。

また、三章での議論から、市民の興味を満たしたり能力を発揮させたりする「場」が重要であることがわかる。世代ごとに「場」について考えると、まず子供世代にとっての場はほとんどの場合「学校」と「家庭」に限られている。先にも述べたが阿南市においてはその学校の数もとても少数で人間関係は同質的である。また、学校以外に彼らが能力や個性を発揮できる場は少なく、彼らの興味を持つ趣味や文化へのアクセスも都市部に比べれば数少ない。多様な人に出会ったり、様々な経験ができたりする場も数少ない。さらに、3-6でも論じたが、どこに行っても自分のことを知っている関係性の下に生きるこの地域では、彼らが「主体的」に活動することは難しい。

また青年、壮年、中年世代における主な「場」は「職場」と「家庭」である。阿南市民が勤める職場はどういった場だろうか。阿南市の商業において事業所数は減少傾向であり、消費は郊外型大型店に取り込まれている。また、3-1でも述べたように多くの阿南市民が働く製造業は全国平均よりは盛んであるが、近年衰退傾向にある。では家庭についてはどうだろうか。図には女性の有配偶率を示しているがこれについては全国平均よりも高くなっている。しかし、もっとも有配偶者率が高くなる50代においても約20%が配偶者を持っていないことがわかる。50代であれば彼らの両親も亡くなっている場合が多いことが考えられるため、「家庭」の場がなく孤立している人々も多数いると考えられる。また、それ以外の場に関しても、子供世代と同じく、能力や個性を発揮できる場や新しく人とつながれる場は少なく、彼らの興味を持つ趣味や文化へのアクセスも都市部に比べれば数少ない。

高齢世代における「場」のうちの一つは「家庭」である。またその他の場としては公民館などのサークルやシルバー人材センターなどが考えられる。また、地域の自治会活動などにも参加している人も他の年代と比べて多いと考えられ、高齢世代は比較的新しく交友関係やつながりを築いていきやすい年代であると考ええる。

ここからわかるように、子供世代、青年世代において新しくつながりを形成したり、能力や興味を満たしたりする場がかけていることがわかる。また、世代や同質的な人間関係を超えて人々がつながる場も現状ではほとんどない。そのような場としては町内会や地区

会などの「自治会」の場が考えられる。阿南市では認可地縁団体として26団体が存在していて、区域全住民の過半数が構成員となっているが、活動内容としては美化・清掃活動、防犯・防災活動、集会所の管理運営や親睦行事などとなっている。しかし、ここで問題なのはこの活動内容の大半が「義務感」に駆られて参加するものであるということである。「楽しさ」や「面白さ」により人々が集う場でなければ、自発的に人々は集まらないのではないだろうか。

また、3-6でも論じたが、阿南市民の主体性のなさも問題の一つである。幸せの四因子を高めていくためには新しく人とつながったり目的をもって新しいことを始めたりするなど主体的な行動が不可欠である。しかし、この問題に対しては、阿南市の地域おこし協力隊の隊員などが、パイプ役として新しく人と人を結びつけたり、潜在的に市民の中にある「地域をどうにかしたい」という意識を呼び起こし行動につなげたりといった解決の兆しもある。このように市民の主体性や新しいチャレンジを後押しする人材はさらに必要であると考えられる。

また、衰退する経済に直面してあらわれるネガティブな意識も打破する必要がある。全体的な経済を向上させるのは難しいかもしれないが、それ以外の部分でポジティブな意識を形成することは可能であると考えられる。

以下ではこれらの課題を打破する具体的な方向性や策について記述する。

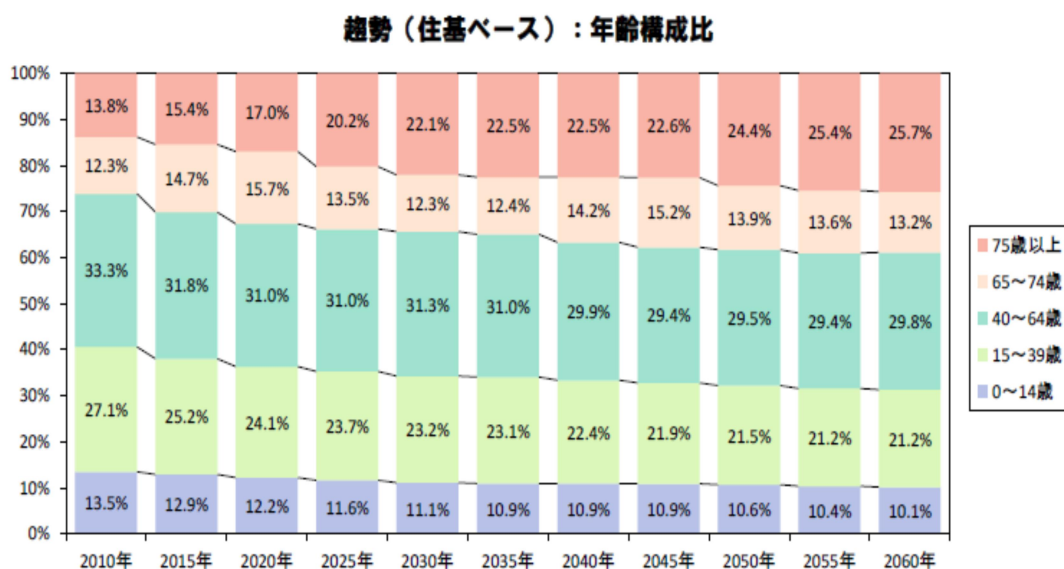
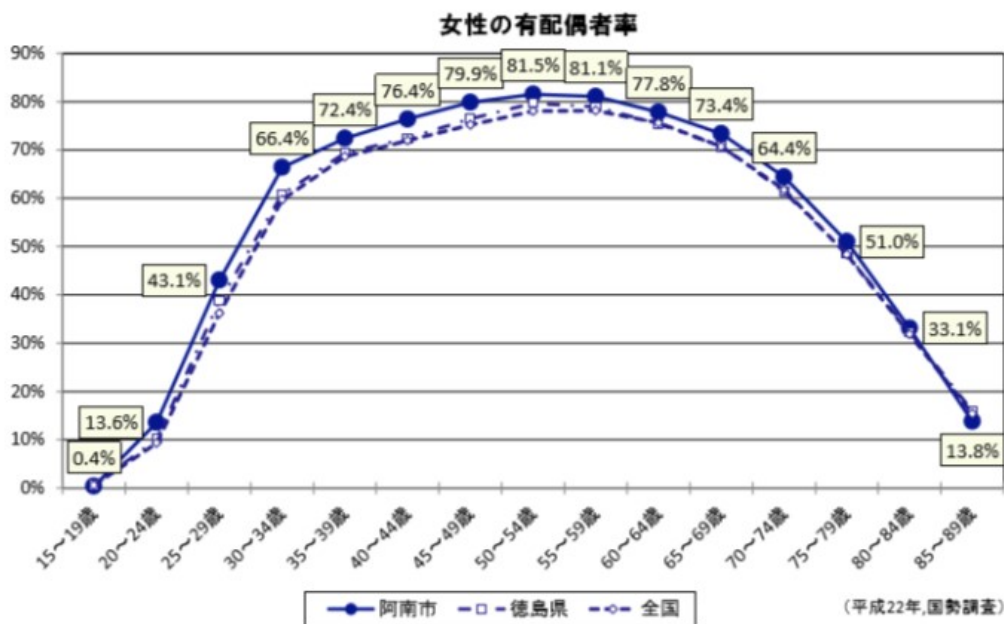


図 10 阿南氏の人口推移予測 『阿南市人口ビジョンより』



9

図 11 女性の有配偶者率 『阿南市人口ビジョン』より

4-2 人々が集う「場」—「楽しさ」と「正しさ」を重ねる—

4-1 で阿南市では新しく人々が出会い、つながりを形成する場の不足について確認した。そこで新しく人々が集う場として参考になる事例を紹介したい。新しく人々が集まる「場」を作ることににおける成功事例として示唆的なのは、徳島市立の NPO 支援機関「徳島市市民活力開発センター」の統括マネージャーを務める岸田侑氏が設立した「グリーンバード徳島」の事例だ。彼は若年層の地域活動の基盤強化をミッションに掲げ、若者による中山間過疎地での事業立ち上げや若者 NPO の設立支援等を手掛ける。彼は 2013 年に県内の若者たちの社会参加・環境課題解決のプラットフォームとして徳島の環境美化活動を行う「グリーンバード徳島」を設立した。

「環境美化」というと、固く、若者が集まらず、地域活動としても形骸化しているという例は多く見受けられるが、グリーンバードについてはそのようなイメージの真逆を狙っている。岸田氏はまず初めに県内の三大学を回り、若者の中でもルックスが良く、友人たちを多くひきつけそうな大学生を複数人集めて活動をスタートさせた。その後、集めた大学生に積極的に SNS で情報を拡散してもらい、彼らの友人たちを巻き込んでいった。またこの活動では、「人のためにやる」や「地域貢献」といったことは強調せず、例えばハロウィンの際は学生が全員仮装をしてゴミ拾いを行うなど「楽しさ」や「新しい友達を作る」といったことに重点が置かれている。

こうすることで「グリーンバードに来ると友達ができる」といった意識を若者の中に巻

き起こし、現在では月三回の活動で一回30人ほどは常に活動に参加する規模となっている。以前までは交流が乏しかった県内の大学生の間で交流が促進されている。また、参加した若者が自分で地域活性のためにイベントを開いたり、活動の輪は広がっている。このように、一般的には若者を呼び込むことが難しい環境美化や地域貢献など「社会的な活動をする場」に若者を多数呼び込むことに成功しているが、幸せの四因子を満たすための「場」作りとして参考にする点はいくつもある。

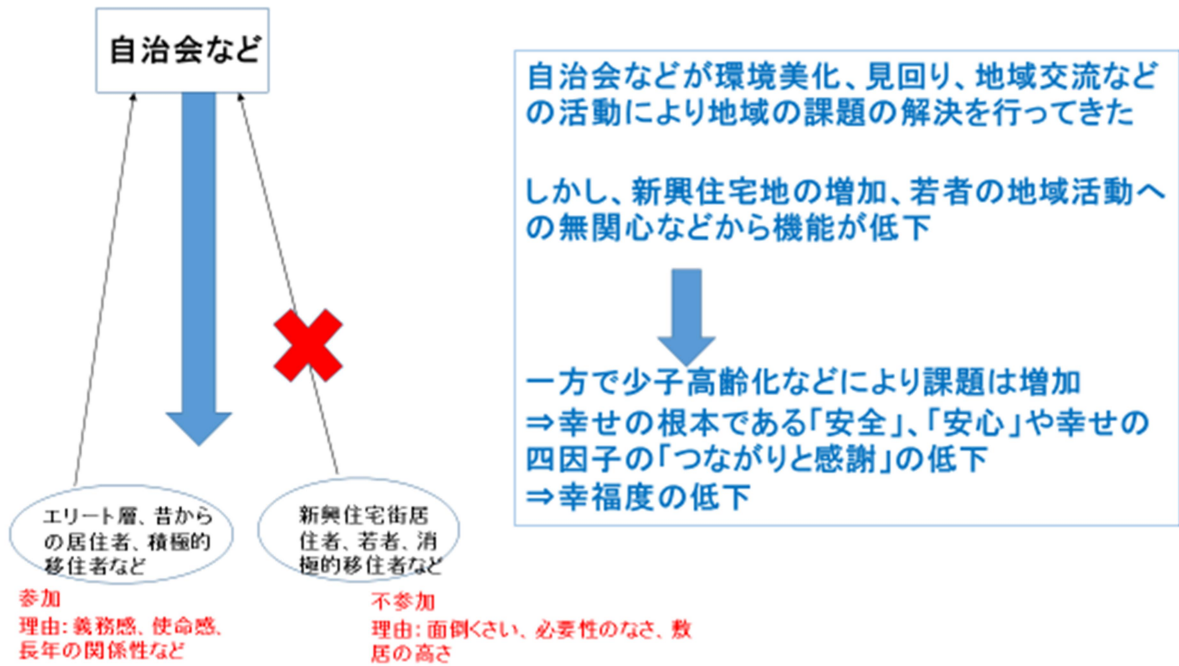
一つは「誰でも参加が可能」な活動である点である。「ゴミ拾い」には特別なスキルや練習は必要なく、また上手い下手もない。そのため、なんの準備もなく気軽に参加できる。「野球」や「俳句」などもともとスキルのある人々が集まり、彼らの能力を発揮したり、新しく交友関係を築く「場」はどのような地域にもあるが、このように誰でも参加が可能という場は意外に少ないのではないだろうか。

また、積極的な「情報発信」や「定期的な開催」も学ぶべき点である。一過性のイベントや数か月スパンの不定期開催の企画などでは、「つながり」を形成することは難しい。そのため定期的な開催は「つながり」の形成に必要不可欠である。また、SNSなどで積極的に情報を発信することで常に多様な参加者を呼び込み、同質的な関係にとどまらない関係性を築くことができる。

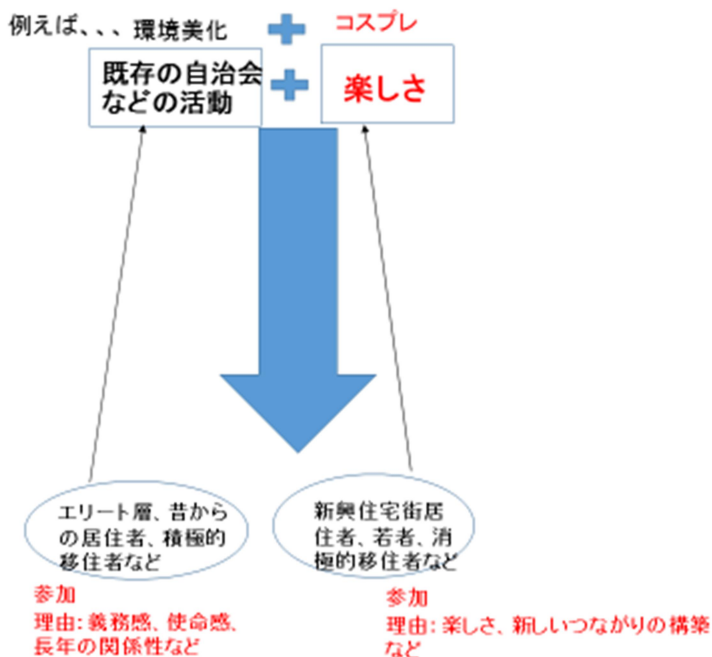
さらに、私が最も重要な点として考えるのは、地域活性や環境美化などの社会的な「正しさ」と、人をたくさん呼び込む「楽しさ」が結びついている点である。に地域活性やコミュニティ内でのつながりの形成などの問題では、一部の人々が熱心に叫ぶ「正しさ」だけが強調され、彼らと若者やそれほど関心のない人々との意識が大きくかい離しているケースが多くみられる。しかし、グリーンバードの活動では「正しさ」を強調せず、若者の「楽しさ」を上手く喚起し、また若者の中でも主要な人物にアプローチして活動を広めてもらうことで活動に対するプラスのイメージを若者目線で広めている。

阿南市において、「正しさ」を唱える機会は多くなっていくはずである。少子高齢化、人口減少が進む中では、地域の中での市民間の世代を超えたつながりの形成や助け合いの促進が不可欠だ。しかし、その「正しさ」を唱え、市民の義務としてそれらを課すのでは彼らを巻き込めない。「正しさ」と「楽しさ」を結びつける目線こそ最も重要な点である。

現状



「楽しさ」と「正しさ」を重ねた活動へ



4-3 市民の興味・能力を発揮する場づくり—誰もが人生の「主役」であること—

「自己実現と成長」の因子の達成率を高めるためには市民が得意なことをしたり、興味を持てることに取り組んだりすることが大切である。「幸福学」の前野教授も 著書の中で「地球上の人類、七十億人が、七十億通りのやり方で、小さくてもいいから自分らしさを

見つけ、その七十億分の一の個性を活かして、社会の中で自分らしく生きていくようなあり方が大切であると述べている。(前野,2012,pp.126-127) ここで述べられているのは「自己実現と成長」とは「高い地位を得る」ことや、「社会を変える」といった理想的なものでなくてよく、自分らしいあり方を見つけその在り方を実現していくことである。

実際に富山県朝日町笹川地区で、は町民それぞれが得意なことや人の役に立つことを創るということをまちづくりの起点として掲げ、町民が得意技を町民へ披露・伝授する会合を自宅で開くなどしている。この笹川地区のまちづくりは多方面で注目され 2015 年には石破茂地方創生担当大臣が視察に訪れている。(久繁,2016,pp.16-17)

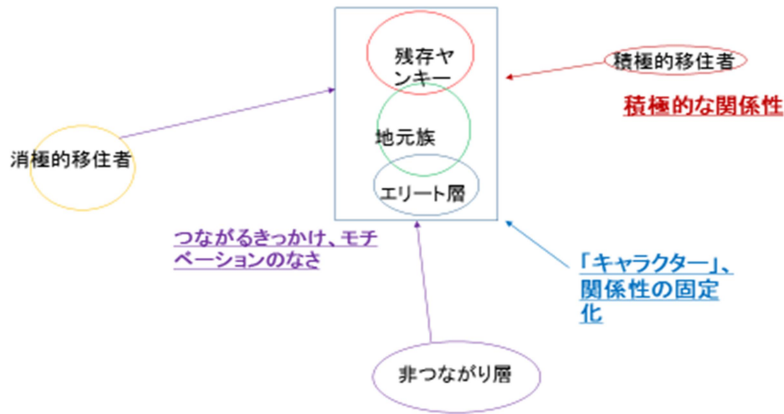
そこで私が提案したいのは市民の持っている得意なことや興味をつなぐ web 上のプラットフォームを用意することである。現状、阿南市の人間関係は同質的であるため、何か自分の興味のあることや得意なことをやりたいと思っても、既存の人間関係の中でしかその仲間を探せないという状況にあると考えられる。そのため、何かをやりたいと思ってもあきらめてしまうケースも多いのではないだろうか。都市部であれば人やサービスの多さから、自分の興味を満たすような場は誰かが用意してくれている場合が多いが、阿南市であればそうはいかない。

そのため、阿南市民共通のプラットフォーム上で「何か」をやりたい人がその意思を表明し、同様の「何か」に興味のある市民がそれに反応しつながるといったことができる媒体を作ることが重要である。これにより「興味」や「得意なこと」どうしでつながる新しい「つながり」ができ、彼らしいことにとりくむ場が生まれる。現状、阿南市の公式的なイベントや企画は阿南市の公式 Facebook など発信されているが、市民発の興味を発信し結びつけることも検討すべきである。

こうすることで、自分のしたいことをするという「自己実現と成長」の達成率が高くなり、新しいつながりが生まれることで「つながりと感謝」の達成率も向上し、新しく生まれたつながりであるため、固定的な人間関係が崩れ、「主体的」に行動しやすくなるのではないだろうか。

現状の関係性

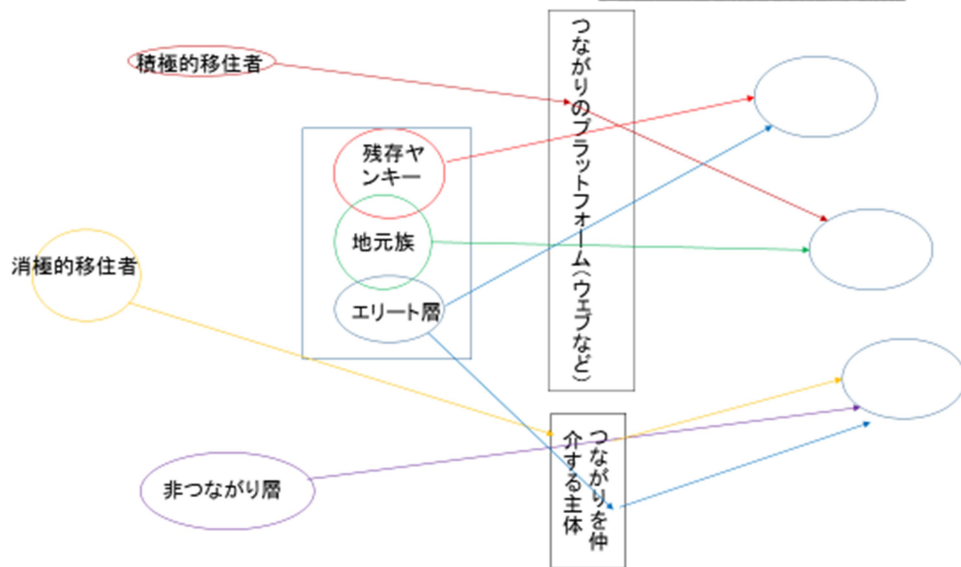
- ・長年積み重ねてきた関係性
- ・地域の中での「キャラクター」の固定化
- ・つながりを生むきっかけ、モチベーションのなさ



同じ志や興味によりつながる関係性へ



主体的に「自己実現と成長」を成し遂げていける新たな関係性を構築



4-4 市民との協同により「前向き」な意識を醸成—小さな進歩に目を向ける—

阿南市や徳島県における少子高齢化などに目を向けると「前向きと楽観」の因子は低くなると考えられる。もちろんこの全体的な経済の動きを向上させることができればよいが、難しいこともある。そのため、「前向き」になるには身近な「進歩」や「成長」に目を向ける必要があると考えられる。

このための具体策として「プロシューマー」という概念を紹介したい。「プロシューマー」とは製品の企画・開発に消費者がかかわるといった概念である。こうすることで自分たちが

かかわったものや事業が推進されていくことで「前向き」な意識が生まれてくるのではないだろうか。

この具体例としては福井県鯖江市の「JK 課」が挙げられる。「JK 課」では地元の JK（女子高生）たちが中心となって、自由にアイデアを出しあい、さまざまな市民・団体や地元企業、大学、地域メディアなどと連携・協力しながら、自分たちのまちを楽しむ企画や活動を行っていく。このように堅苦しくない方法で市民のまちづくりへの参加はまちの小さな「進歩」に目を向けさせ「前向き」な意識を醸成できるのではないだろうか。市民のまちづくりへの参加は「民主主義」の観点からとらえられがちだが、市民の「前向き」な意識の醸成と、それからつながる市民の幸せという視点でもとらえてみるべきである。

4-5 「阿南市ならでは」の人生の物語を生み出す—「価値」を市民の人生の内部へ—

「独立とマイペース」の因子を達成していくためには都市部の生活などと比較をしてしまおうという意識をできるだけ抑え、「阿南市ならでは」の生活の価値を見出していく必要がある。「年収」や「最新のものへのアクセス」という点では都市部には勝てない。この点について阿南市への積極的な移住者は「阿南市で農業をして都会にはないマイペースな生活を送りたい」などといった「阿南市ならでは」の価値を自分から見出すことができている。

また、残存ヤンキー層は特別な目的意識はないが、同質的で強い人間関係や地元での暮らしへの肯定感により「阿南市ならでは」の価値を見出している。しかし、他の人々は「阿南市ならでは」の価値を見いだせていない現状にあるのではないだろうか。都市部での暮らしの価値がテレビやインターネットなどにより容易に入ってくる現代では、暮らしの価値が「都市部」のものに合わされている場合も多い。

そこで私が提案したいのは、阿南市民が「阿南市ならではの物語」を人生の中で描くサポートを積極的にすべきであるということである。たとえば小さなころから阿南市の自然を生かした釣りやサーフィンなど阿南市でしかできない楽しみを彼らの「日常」の中に組み込ませる。そうすることで市民の中に、都市部にはない価値を彼らの人生の中に価値として授け、彼らの人生の物語の一部とすることが必要なのではないだろうか。

4-6 市民の特徴を活かしたまちづくり—市民の性質にまちづくりを重ねる—

幸せの四因子を達成していくためには市民の主体的な行動と参加が必要不可欠であり、そういった行動の連鎖が地域内での内的な幸せの向上を生む。3-5でも論じたように、当事者意識を持ち周りを結び付け行動する人が一人でもいれば、「つながり」が生まれ、新たな「目標」が市民の中で生まれ、幸せの四因子の向上につながってくる。ではだれがどのような役割を担うとうまくいくだろうか。本稿でも論じたように阿南市民といってもそれぞれ

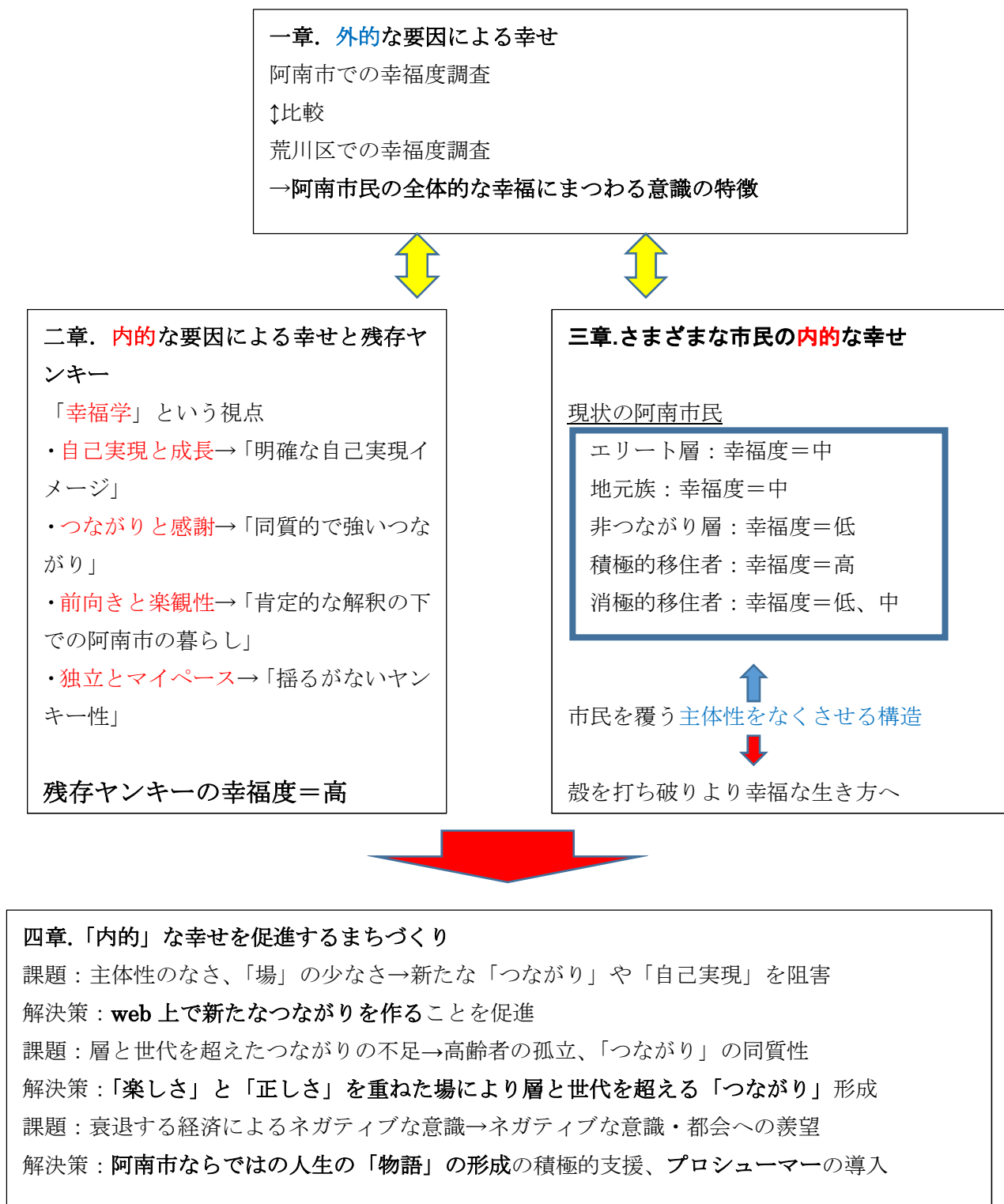
れ持っている性質が違うため、それぞれの気質や特徴を捉え、活かすことが大切である。

そこで着目すべきなのは残存ヤンキーである。彼らは成人式で派手な格好をするなどやんちゃな面が目立つ半面で、彼らが地域の祭りの担い手として活躍するなど地域の中でも重要な役割を果たしている。これらの正反対ともいえる行動をとる彼らだが、その理由は2-4-2で紹介した彼らの持つヤンキー性により駆り立てられたものである。彼らの持つ気質である、気分が高揚するという意味の「アゲ」や男らしさが強調された「気合い」の精神は祭りにも成人式の派手な格好にも共通する点だ。また、彼らは地元で親密な人間関係を築き、地元への愛着も深い。そのため、彼らが地域の中でつながりの形成や地域おこしの担い手になっていくことが期待される。しかし、ここで重要なのは彼らの行動原理を理解したうえで活躍の場を与えることである。つまり、彼らの好む「アゲ」や「気合い」などのヤンキー性と地域的な課題を結び付けることが重要だ。そのため、例えば地域おこしの担い手となることやイベントに協力するうえで、「夢」や「熱い」などといった彼らが好む言葉や要素を重ねるなどして彼らを取り込む必要がある。そうすることで少数でも彼らを取り組むことができれば、彼らの持つ強固な人間関係によりその活動への参加のネットワークが広がっていくことが期待できる。

また、阿南市への移住者も期待ができる存在である。彼らの特徴は阿南市の外から来た存在であるがゆえに、地域の中で無駄なしがらみなどが無いという点である。そのため、阿南市出身者に比べ大胆で新しい行動に出ることが比較的容易であると考えられる。そのため、彼らをまちづくりの場に取り込んでいくことが重要である。しかし、彼らの多くは地域の自治会などには参加していない場合が多いと考えられる。そのため、行政の側が移住者同士で親交を深め、まちづくりに参加する場を用意することが必要である。

5. 終章

5-1 まとめ (フロー図)



5-2 本論文の到達点と意義

本論文では阿南市民の幸せについて着目し、阿南市民の「生き方」の目線に立った幸せについて論じてきた。第一章では阿南市と荒川区の幸福度調査の結果から阿南市民の幸福の特徴について考察した。しかしこの幸福度調査は「環境」や「産業」など「外的」な部分に目を向けた調査となっていた。まちづくりを行う上で「外的」な要素を整えることは大切だが、そのまちでどう生きるかという「内的」な幸福について考えることも大切だと考えた。そのため、市民を生き方により類型化しそれぞれの生き方と幸せに着目した。第二章ではここで特徴的な生き方をしている残存ヤンキーを取り上げ、彼らの生き方と幸せについて記述した。そして第三章では、その残存ヤンキーと対比的に他の層の生き方と幸せについて記述し、それらが形作られる構造的要因についても記述した。最後に第四章では市民の生き方の目線から見た幸せを実現するためのまちづくりの方向性や方法について記述した。

本論部の意義については二つある。一つは「内的」な幸せに注目したことだ。一律に経済成長を目指すという流れに限界を感じ、「幸せ」に目を向けようというのは日本全体の流れとして起こってきている。しかし、「外的な幸せ」をいくら整えてもその世界をどう生きるかという「内的な幸せ」に目を向けないと真の意味で幸せは達成されない。最初にも述べたが例えるなら、もし阿南市にディズニーランドができたとしても一緒に行く友人がいなければつまらないし、いくら立派なスポーツ施設があっても、運動を日常的にしない人にとっては気軽に体を動かせる集まりの場がなければスポーツ施設にはいかないだろう。わたしたちは定量化して見えやすい「外的な幸せ」に目がいきがちであるが、そうすると本質的な「幸せ」から離れていき、「幸せ」の形骸化を招く。もちろん「幸福学」も一つのモデル化された「幸福」であるが、「幸福学」のように「内的な幸せ」を促進する目線を忘れないでほしい。

二つ目は普段「当たり前」として見過ごされてきた阿南市民の意識や幸せについて構造的に記述した点である。これは社会学の意義でもあるかもしれないが「当たり前」として私たちが見過ごしている点を構造化することで、それを改善するための策が浮かんでくる。人口減少と少子高齢化が避けられないこれからの時代に「当たり前」を疑い、市民の生きる「世界」の在り方を考え、そしていい方向に変えていく必要があるのではないだろうか。本論文では「内的」な幸せについて論じたが、この「内的」なありかたは今からでも変えられるものである。「生き方」を帰れば見える「世界」も違ってくる。「当たり前」を疑い阿南市民の生きる「世界」を変える一助となれば幸いである。

ちなみに、本論文では便宜上「ヤンキー」という言葉を用いたが、これに差別的な意味はなく、市民の生き方の差異を示すために用いたものであることをご理解いただきたい。また、市民の類型化の部分ではヒアリングが若者に偏ってしまった部分があり、中年・高齢者の市民の意識や生き方の記述が十分ではなかったと感じている。市民の類型化の部分に疑問を感じる方がいるとすれば、筆者の力不足によるものである。しかし、もし市民の

方がこの論文を読むとすれば、自分の生き方について今一度幸せの四因子に沿って考えてみてほしいと思う。そうすることで、自分の中の「当たり前」を構造化し、より幸せな阿南市での生活について考えてみていただきたい。

5-2 謝辞

本論文を執筆するにあたり、多くの方々に大変お世話になりました。その方々にこの場をかりて深く感謝を申し上げます。

まずヒアリング調査に快く応じてくださった、阿南市地域おこし協力隊の助田様、グリーンバード徳島の岸田様、そして阿南市民の皆様にご心から感謝を申し上げます。阿南市民の皆様には普段の生活の中での率直な考えや意見などを聞かせていただいたおかげで、ありのままの阿南市民の実態を記述することができたと思います。また、阿南市、徳島県で地域活性化のために活動を行っている助田様や岸田様のお話を伺ったおかげで、何もない阿南氏ももっと幸せな地域にしていけるのではないかと考えられるようになりました。

また、論文を執筆するにあたり、参考にさせていただいた先輩方、丁寧なコメントをくれた後輩の皆さん、そして二年間ゼミで苦楽を共にし、論文にも真剣で率直な意見をくれた同期の皆さんのおかげで私の論文は磨かれていったと思います。多種多様で個性的で学問に対してもこだわりを持った皆さんとともに学べたゼミでの活動は私にとっての大きな財産となりました。

そして最後に本論文を完成させるにあたり、最初から最後まで的確なアドバイスをくださった浦野正樹先生に深く感謝申し上げます。先生が常に的確にアドバイスをくださったおかげで、私のまとまりのない考えも一つの形としてここに残せたと考えています。

皆さんのご協力のおかげで、私の人生をかけた問であった「阿南市で生きる幸せ」についてある一定の解が出せたような気がしています。しかし、これからも考えることを辞めず、「阿南市で生きる幸せ」、「自分の人生における幸せ」、そしてゼミで学んだ「地域社会学」について考えていきたいと思っています。

参考文献

- ・ 下田直春、『増補改訂 社会学的思考の基礎』、新泉社、1984年
- ・ 原田曜平、『ヤンキー経済 消費の主役・新保守層の正体』、幻冬舎、2014年
- ・ 南波功士、『ヤンキー進化論 不良文化はなぜ強い』、光文社、2009年
- ・ 前野隆司、『幸せのメカニズム』、講談社、2013年
- ・ 久繁哲之介、『競わない地方創生—人口急減の真実』、時事通信社、2016年
- ・ 堀裕嗣、『スクールカーストの正体』、小学館、2015年
- ・ 斎藤環、『世界が土曜の夜の夢なら ヤンキーと精神分析』、角川書店、2012年
- ・ ミシェル・L・クロスリー著、角山富雄/田中勝博監訳、『ナラティブ心理学セミナー 自己・トラウマ・意味の構築』、金剛出版、2009年
- ・ ポール・E・ウィリス著、熊沢誠・山田潤訳、『ハマータウンの野郎ども』、ちくま学芸文庫、1996年
- ・ 徳島県ホームページ、宝の島・徳島 わくわくトーク 第46回
,<http://www.pref.tokushima.jp/governor/dialogue/wakuwaku-talk/2016022900011/movies/3/> (2016.12.5 最終閲覧)
- ・ 阿南市、『阿南市民まちづくり意識調査』、2008年
- ・ 阿南市、『市民幸福度調査結果報告書』、2016年
- ・ 阿南市、阿南市人口ビジョン、2016年
- ・ 荒川区、『荒川区民総幸福度（GAH）に関する区民アンケート調査』
https://www.city.arakawa.tokyo.jp/kusei/chosa/GAH_Q.html
(2016年12月5日最終閲覧)
- ・ 公益財団法人荒川区自治総合研究所、『荒川区民総幸福度（GAH）に関する 研究プロジェクト第二次中間報告書』、2012年
- ・ 人口統計ラボ、<http://toukei-labo.com/>
(2016年12月10日最終閲覧)
- ・ 地域経済分析システム RESAS、<https://resas.go.jp/>
(2016年12月10日最終閲覧)